新潟県立歴史博物館評価委員会

令和５年度における館の自己点検に対する二次点検評価報告書

令和６年８月

活　動　評　価　表　（総括）

博物館の基本理念

○　県民の営みの証である歴史資料を記録・整理・保存し、新たな歴史像※を県民とともに創造していきます。
○　人々と連携しながら、現在から未来へ、地域から世界へと県の価値を発信していくことを使命とします。

こうした活動を通して
『より県民に愛され、利用され、″にぎわいのある博物館″』を実現します。

※「新たな歴史像の創造」
博物館の活動を通じて再発見される新潟県の価値や魅力が、新潟県の歴史についての新鮮なイメージとして、県民の皆さん一人一人の中で実を結んでいくこと

Ⅰ　博物館による自己点検と評価

取組実績

○［評価指標］利用者数　（単位：人）

	令和４年度	令和５年度	
	実績	目標	実績
① 利用者総数	（単年）46,649	増加させる	63,070
② 観覧者数	（単年）39,836		50,423

＊観覧者数の集計方法変更
令和２年度から企画展観覧者が常設展観覧料を支払い常設展も観覧→２名で計上

○［評価指標］満足度

	令和４年度	令和５年度	
	実績	目標	実績
① 来館者満足度	95%	維持・向上させる	97%
② 企画展	91%		93%
③ 講座等 講座・講演会 体験コーナー	 96% 100%		 95% 100%
④ 来館者対応	100%		100%

(1)**収集保管**　収蔵資料データ整理の推進、収蔵庫の良好な保存環境の継続
(2)**展示**
［常設展］展示環境の維持、ワンポイント解説ゲスト解説の実施
［企画展］有料展覧会２回（「伝える　災害の記憶」、「上杉景勝　その生涯」）
［テーマ展］「守れ！文化財」「越後の木綿　いまむかし」
４県連携事業「山の洲文化財交流展」
(3)**調査研究**　外部研究費５件（ほかに研究分担者及び協力者としての取得７件）

	(4)**教育普及**　館内講座・出前講座の継続、体験活動の新プログラム２件導入、教育機関への周知活動の継続、館内ボランティアの人員増 (5)**連携**　地域史研究ネットワーク、友の会事業の着実な実施など (6)**情報発信**　新聞雑誌等への露出増加、ホームページ及び SNS（フェイスブック、X、インスタグラム）による情報発信の継続 (7)**管理運営**　博物館運営方針に基づいた検証・評価の実施
分 析	(1) 利用者総数、観覧者数 ★観覧者数　常設展Ｒ４：30,904 人→Ｒ５：34,643 人（112%） 企画展Ｒ４： 8,932 人→Ｒ５：15,780 人（177%） (2) 学校団体来館者数　Ｒ４：約 9,000 人→、Ｒ５：約 7,900 人（88%） 新型コロナにより増加した県内修学旅行利用が５類移行に伴い減少した。 (3) 満足度の評価指標は各項目とも昨年度並みを維持している。 (4) 学会発表や論文執筆件数等の増、SNS フォロワーの着実な増加などが成果としてあげられる。
課 題	(1) 企画展の展示方法・テーマ設定のさらなる工夫 (2) 具体的な集客に向けた広報等への新たな取組 (3) 調査研究活動の充実と県民還元の推進 (4) 支援団体・協力者との一層の連携強化 (5) アンケート調査方法の見直し
取組に対する自己評価	評価できる　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留

Ⅱ　評価委員会による検証・評価

取組に対する全体的評価	評価できる　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留
評価のコメント及び今後の課題方向性等の提言	・ 利用者総数・観覧者数が約３割増加したことは、コロナ禍が落ち着き、これまで制限されてきた行動が緩和されたことにもよるが、創意や工夫といった当館職員の日々の尽力によるものと考えられ、高く評価できる。 ・ 館の基本理念にも掲げられている「新たな歴史像の県民との創造」には県民一人ひとりが本県の歴史に触れあうことが肝要であり、あらゆる世代の利用が望まれる。この点で、新型コロナの５類移行により県内修学旅行利用の学校団体来館者数が減少したことは、懸念されるところである。今後は、これらの利用者が再び来館するような仕掛けなど引き続きの恒常的な利用者の確保が重要であり、その意味で各方面への聞き取りや志向の動向把握などを通した若年層のニーズの把握は契機になりえるものと思われる。 ・ なお、新たな展開を図ろうとする場合、職員減少の中ではすべて従前と同じ行動を前提としていればそれは困難であり、社会経済の変化にも対応しながら新潟県の価値を発信し続けるためには、引き続き館内外の関係者一人ひとりの自覚と思考が求められる。

活　動　評　価　表

機能・取組分野	収集・保管	学芸課
取組方針	・本県の歴史を明らかにするために欠かすことのできない資料の収集・整理に努めるとともに、そのデータ化を推し進める。 ・良好な資料保存環境を維持する。	
主な実現方策	・資料の収集の継続と収集資料の整理を推進する。 ・ＩＰＭによる環境管理を継続する。	

Ⅰ　博物館による自己点検と評価

取組実績

○　［評価指標］収蔵資料目録の刊行準備

令和４年度	令和５年度		令和９年度
実績	目標	実績	目標
１目録	1	1	１目録

○　［評価指標］データベース公開数(更新を含む)

令和４年度	令和５年度		令和９年度
実績	目標	実績	目標
112 件	300 件以上	1,889 件 （うち、新規０件）	300 件以上

※令和５年度からは新規公開に加えて既公開データの内容更新もカウントしている。

収集

(1)資料寄贈　　８件

(2)収蔵資料破損　　なし

(3)収蔵品整理作業　継続

保管

(1)文化財害虫モニタリング測定　月１回

(2)殺・防虫消毒

展示室殺虫消毒１回、館内殺虫消毒１回、館外防虫施工２回、燻蒸室内燻蒸　４回

(3)収蔵庫温湿度管理　通年

(4)空気環境管理

カビ等浮遊菌調査３回、イオンクロマトグラフ空気物質測定１回

(5)収蔵庫定期清掃及び資料点検　１回

(6)収蔵庫定期点検　月１回

(7)ＩＰＭ研修　４回

(8)保管環境研修会参加　１回

文化財活用センター　パッシブインジケータアプリ説明会参加

分　析

(1) 保管環境は大きな事故もなく資料を保存することができた。

(2) 資料整理は、未整理の資料も多いが、データベースの記載を充実できた。

課 題	(1) 未整理資料の整理を進めたいが、人員不足のため追い付かない。 (2) 収蔵庫が満杯状態で、新たな資料の受け入れがしにくい状況にある。
取組に対する自己評価	評価できる　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留

Ⅱ　評価委員会による検証・評価	
取組に対する全体的評価	評価できる　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留
評価のコメント及び今後の課題方向性等の提言	・評価指標は２項目とも目標を達成しており、評価できる。 ・データベース公開は、内容の更新作業も博物館の重要な業務といえる。職員が業務過多とならないよう、今後も計画的に進めてほしい。 ・良好な保管環境を維持するため、点検、IPM 研修等、様々な活動を行っている。また、「文化財活用センター　パッシブインジケータアプリ説明会」に参加するなど、職員の知識向上に努めていることがわかる。「保存」は目立たない分野だが、大いに評価できる。 ・未整理資料の整理など、人員不足が課題になっているが、収集・保管で対応が後手に回ることがないよう、十分に配慮してほしい。 ・収蔵庫不足の問題は、喫緊の課題として浮上している。収蔵庫の増設は、膨大な予算が必要だろうが、収集・保管・公開の好循環が生まれるよう、改善策の速やかに検討を開始してほしい。

活　動　評　価　表

機能・取組分野	展示－常設展示	学芸課
取組方針	・設備・機器・資料の適切な管理に努め、良好な見学環境を維持する。 ・常設展示の十分な活用を推し進める。	
主な実現方策	・日常の適切な維持管理と定期的な資料更新を継続する。 ・より柔軟な展示と活用方法の工夫に努める。	

Ⅰ　博物館による自己点検と評価

取組実績

○　［評価指標］新規展示試行回数

令和４年度	**令和５年度**		令和９年度
実績	**目標**	**実績**	目標
－	**１件**	**１件**	１件以上

○　［評価指標］ワンポイント解説

令和４年度	**令和５年度**		令和９年度
実績	**目標**	**実績**	目標
676 人	**500 人**	**665 人**	500 人

(1) **定期資料展示替え**　新潟県のあゆみ・雪とくらし・米づくり・縄文文化を探る、それぞれについて４月、10 月に実施。
(2) **常設展定期点検**　隔週（照明・電気の点検、ケース内及びガラス清掃）
(3) **常設展の保守点検・補修**　２回（展示品・機器の総合点検）
(4) **常設展のワンポイント解説**　90 回、平均参加人数７人
(5) お客様の不注意から、「あゆみ」展示模型を破損したが修理できた。
(6) 新規展示手法の取り組みの一環として、結果をインタラクティブに明示する展示型アンケートを試行。来館者がどこから来たのかを地図上にプロットしてもらい、視覚的に表現している（令和６年度継続予定）。

分　析

(1) 常設展示室の照明 LED 化は進んだ。（新潟県のあゆみ、縄文文化を探る）
(2) ワンポイント解説は目標参加人数を上回った。

課　題

(1) 常設展示室全体の照明 LED 化（米づくり、縄文人の世界、が未了）
(2) 新規展示、新たな解説手法の開発。

取組に対する自己評価

評価できる　　やや評価できる　　やや評価できない　　評価できない　　判断保留

Ⅱ　評価委員会による検証・評価

取組に対する全体的評価

評価できる　　やや評価できる　　やや評価できない　　評価できない　　判断保留

評価のコメント及び今後の課題方向性等の提言	・評価指標となる新規展示試行回数、ワンポイント解説共に、実績は目標値をクリアしている。 ・定期的な資料展示の入れ替えや定期点検、保守点検、補修なども適切に行われており、評価できる。 ・新規展示手法の取り組みとしてアンケートを実施し、「来館者がどこから来たのか」を地図上に視覚的に表現する展示がなされた。館にとってはマーケティングとなる試みであり、来館者にとっては館の実態を知ることが出来る展示となった。継続的に実施予定とのことで、来館者データとして今後の企画にも生かしてほしい。 ・展示室照明の LED 化も進んできているが、未着手の展示コーナーがある。 予算確保の厳しい中ではあるが環境面への配慮からもさらに LED 化を進めてほしい。 ・適切な維持管理、展示替え等とともに、新たな試みが実施されていることは評価できる。

活　動　評　価　表

機能・取組分野	展示－企画展示	学芸課
取組方針	・調査研究の反映や収蔵資料の活用によって魅力ある企画展を実施する。 ・集客を意識し、県民の関心を反映した企画展示に努める。	
主な実現方策	・年４回程度の企画展及びテーマ展示の実施を目標とする。 ・入場者の満足度を高める。	

Ⅰ　博物館による自己点検と評価

取り組み実績

○　［評価指標］企画展示ジャンル数

令和４年度	**令和５年度**		令和９年度
実績	**目標**	**実績**	目標
３	**３以上**	**３**	３以上

※歴史・民俗・考古の各ジャンルに関する展示を実施。

○　［評価指標］満足度（企画展のみ）

令和４年度	**令和５年度**		令和９年度
実績	**目標**	**実績**	目標
91％	**90％**	**93％**	90％以上

※企画展等アンケート回答数（春 92、夏 573、秋 169、冬 108、四県 92）

(1)企画展　　観覧者数(実績)　(開催日数)

春「伝える　災害の記憶」　3,915 人　(39 日)

夏「上杉景勝　その生涯」　11,865 人　(39 日)

(2)関連講演・講座　参加者（含テーマ展等）

講演会（春 37 名、夏 131 名、秋 25 名＋46 名、冬 89 名、四県 99 名）

関連講座（夏 74 名、冬 66 名）

(3)関連イベント等

春「なまず絵缶バッジを作ろう」、「くるりんまといスティックを作ろう」

夏「ミッション中！」「家族 de わいわいミュージアム」

(4)企画展以外の企画展示室実施事業

９月　・四県連携「山の洲文化財交流展」

10～12 月　・秋季テーマ展示「守れ！文化財」

１～２月　・冬季テーマ展示「越後の木綿　いま　むかし」

３月　・新潟県立歴史博物館友の会主催「マイコレクションワールド」

・「kid’s 考古学新聞コンクール全国巡回展」

(5)企画展示室稼働日数　211 日（開館日 308 日）

分 析	(1)展示ジャンルは歴史、考古、民俗をカバーした。 (2)春季展は、巡回展であったが災害という人々の関心のある身近なテーマでもあり、当館で開催した意義は大きかった。 夏季展は、上杉景勝のメモリアルイヤーという時宜に適したテーマであり、マスコミの協力を得ることもできて多くの入場者があった。 山の洲文化財交流展は初の静岡、山梨、長野との４県連携展であり、調整に多くの困難もあったが、本県のみならず連携各県でも好評を得た。 秋季テーマ展は、外部資金による研究成果の発表という性格で、内容的には地味ではあるものの、博物館に関する重要な視点をアピールすることができた。 冬季テーマ展は、これまで積み重ねた調査成果を多くの県民に披露する展示であり、地域の小規模な資料館などとの連携により各館の活性化にも寄与した。 (3)来館者満足度は目標を上回る数字であった。
課 題	(1) 学芸員数の減少により、企画展を開催するマンパワーが足りない。今後はボランティアの活用等についても検討していきたい。 (2) 予算の減少により、資金を十分に使える企画展を開催することができず、経費をかけずに創意工夫で開催できるテーマ展を実施している状況である。
取組に対する自己評価	評価できる　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留
Ⅱ　評価委員会による検証・評価	
取組に対する全体的評価	評価できる　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留
評価のコメント及び今後の課題方向性等の提言	・企画展は、予算が減額されたことで、令和２年度に年４回開催から春・夏の２回開催となり、その代替として、テーマ展示を秋・冬の２回開催していることは、社会的責任を果たすという意味で評価できる。 ・展示ジャンルも、「歴史」「民俗」「考古」の３分野となり、目標を達成していること、展示内容の質が高いこと、企画展示室の稼働日数が開館日数の３分の２以上となったことも評価したい。 ・今後も厳しい予算や人員配置の状況下ではあるが、創意工夫をしながら来館者を増やせる企画展やテーマ展示などの継続を期待する。

活　動　評　価　表

機能・取組分野	調査・研究	学芸課・経営企画課
取組方針	・本県の歴史系博物館の拠点として、質の向上を目指す。 ・館活動の根幹である調査研究の成果の県民への還元に努める。	
主な実現方策	・総合・個別研究費などを有効に活用した研究活動を推進し、その成果を県民に還元する。 ・講座参加者の満足度を高める。	

Ⅰ　博物館による自己点検と評価

取組実績

○　［評価指標］外部研究費取得件数

令和４年度	令和５年度		令和９年度
実績	目標	実績	目標
12（６）	６	12（７）	６件

（）内は研究分担者及び研究協力者分で内数

○　［評価指標］学会発表等件数

令和４年度	令和５年度		令和９年度
実績	目標	実績	目標
15 回	11	16 回	11 回

○　［評価指標］論文等執筆件数

令和４年度	令和５年度		令和９年度
実績	目標	実績	目標
39 件	55 件	57 件	55 件

(1)　外部研究費（科学研究費ほか）

・渡部浩二 「佐渡金銀山技術書群の分析に基づく鉱山資料の集成と鉱山社会史の解明など

(2)　学会発表等

・宮尾亨「Archaeomaterial image restoration of Oyu stone circle's sundial-shaped stones, by CycleGANs」東アジア考古学会

・陳玲「越後の木綿の諸問題をめぐって一移入品の木綿類と木綿栽培を中心に」新潟県民具学会　など

(3)　論文等執筆

・山本哲也「久米邦武が見た博物館の真実－『米欧回覧實記』の記述から－」

・浅井勝利「集落の境界をめぐる祭祀」、など

分　析

(1)外部研究費は研究分担者を含め、目標を上回る取得件数である。

(2)論文等執筆件数は研究員数が減少しているにもかかわらず目標に達した。

課　題

(1) 外部資金のさらなる獲得。

(2) 学会発表、論文等による研究成果のより一層の還元。

取組に対する 自己評価	評価できる　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留
Ⅱ　評価委員会による検証・評価	
取組に対する 全体的評価	評価できる　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留
評価のコメント 及び今後の課題 方向性等の提言	・日本学術振興会の科学研究費助成といった外部資金の取得件数は、目標の倍に達しており、館の調査・研究が学術的にも高く評価されていることの証と言える。今後は上記助成以外の外部資金の獲得も視野に幅広い調査・研究の展開を期待する。 ・学会発表等件数について、目標値を上回る実績を示しており、また、論文等執筆件数についても、令和４年度は目標値を下回ったものの、令和５年度はそれを上回っている。人員の減少等の環境の中で、これらにおいて大きな成果を示せたことは、研究員の多大な尽力などがあったものと考えられ、大変評価できる。 ・館の調査・研究の目的の一つに「調査研究の成果の県民への還元」があることから、今後はこれらの調査・研究の成果を展覧会における図録の作成などを通して還元していくことを期待する。

活　動　評　価　表

機能・取組分野	教育・普及 ／ 学校教育	経営企画課
取組方針	・学校教育に一層活用される博物館を目指す。 ・新潟県民としての自覚と誇りを持つ教育に貢献する。 ・館内及び館外活動の充実を図る。	
主な実現方策	・教育機関への施設利用の周知。 ・体験学習・体験活動の新たなプログラムの開発・導入に努める。	

Ⅰ　博物館による自己点検と評価

取組実績

○　［評価指標］県内小学校利用率

令和４年度	**令和５年度**		令和９年度
実績	**目標**	**実績**	目標
23%	**30%**	**23%**	30%

○　［評価指標］体験活動の新プログラム導入件数

令和４年度	**令和５年度**		令和９年度
実績	**目標**	**実績**	目標
2	**1**	**2**	１件以上

○　［評価指標］体験プログラム参加者満足度

令和４年度	**令和５年度**		令和９年度
実績	**目標**	**実績**	目標
100%	**90%以上**	**100%**	90%

(1)県内小学校来館校数　89 校(延べ数) R４：96 校

・昨年度は新型コロナによる行動制限があり、修学旅行を県内にする学校があったが、今年度、５類移行を受け、県外に旅行先が移ったため、減少となった。

(2)体験活動の新規プログラム

・企画展・テーマ展にちなんだ新規オリジナルプログラム「クルリンまといスティックを作ろう」、「くるみボタンを作ろう」を企画し、実施した。

・体験活動は、感染対策に留意をしつつ、大人も子供も楽しめる活動を企画、実施している。

(3)出前授業の実施（まが玉づくり、縄文授業、北前船など）17 回 806 人

・17 回の内訳は小学校 12 回、中学校２回、高等学校３回

・昨年度（R４）の７回 418 人（小学校６回、高等学校１回）に比べ大幅に増加した。要因として、５類移行による制限緩和により、学校に講師を招くことへの抵抗がなくなったこと、バス輸送費の高騰が考えられる。

(4)教育機関への施設利用の周知活動

・県内小・中・高・特別支援学校へ利用案内や各企画展チラシを送付した。

(5)学校との連携

・新潟県教育委員会が行っている高校生インターンシップには、４名の参加があった。

・中学校の職場体験については、６校からの依頼を受け入れた。(延べ 32 人)

分 析	(1)体験活動の満足度は高い水準を維持している。

	(2)新規の体験プログラム「クルリンまといスティックを作ろう」は長岡造形大学の学生のアイデアを採用した。 (3)バス輸送費の高騰化による影響からか、遠方の学校による出前授業のニーズが高まりつつある。そのため、出前授業の実施回数、参加人数は昨年度より増加している。可能な範囲で要望に応えるよう努めている。 (4)視察や来館の際に、教職員からは、展示や解説、体験活動について、ぜひ、見学・体験させたいと高い評価を得ている。来館した学校から出前授業の依頼が来ることもある。
課 題	(1)来館時のバス輸送費の高騰化により、来館を控える団体が増えつつある。 (2)学校関係者に対する効果的な広報活動の実施 (3)学校のニーズに合わせた案内説明や活動内容の実施 (4)企画展・常設展にかかわる新規体験活動の開発
取組に対する自己評価	評価できる　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留

Ⅱ　評価委員会による検証・評価	
取組に対する全体的評価	評価できる　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留
評価のコメント及び今後の課題方向性等の提言	・県内小学校 440 校のなか 101 校の学校団体の利用があった。令和４年度は 96 校ということを考えると評価できる。今後も利用促進の広報活動を展開してほしい。 ・体験活動の新プログラム導入について、目標回数を超えたことは評価できる。また、体験活動の満足度は常に高いことも評価できる。今後も新規のプログラムを開拓するなど、積極的な体験活動を期待する。 ・出前授業の依頼が令和４年度の７回 418 人に対し、令和５年度は 17 回 806 人となった。大幅に増加していることは評価できる。今後も企画展をきっかけにしたテーマでの出前授業を開拓するなど、新たな取り組みに挑戦してほしい。

活　動　評　価　表

機能・取組分野	教育・普及 ／ 社会教育	経営企画課
取組方針	・県民の知識・教養を高め、県民が豊かな社会生活を営むための機会や情報を提供する。 ・館内・館外での活動の充実を図る。	
主な実現方策	・社会教育機関との連携に努める。 ・館内講座・出前講座を継続する。 ・ボランティアの受入の推進。	

Ⅰ　博物館による自己点検と評価

取組実績

○　［評価指標］出前講座の参加者満足度

令和４年度	**令和５年度**		令和９年度
実績	**目標**	**実績**	目標
93%	**90%**	**97%**	90%以上

○　［評価指標］館員の講座・講演会の参加者満足度

令和４年度	**令和５年度**		令和９年度
実績	**目標**	**実績**	目標
96%	**90%**	**95%**	90%以上

○　［評価指標］ボランティアの活動延人数

令和４年度	**令和５年度**		令和９年度
実績	**目標**	**実績**	目標
258 人	**500 人**	**440 人**	500 人以上

(1)出前講座　県内 12 市町村からの要請で 32 回実施、参加者 618 名

・Ｒ４年度：11 市町村 22 回 543 人

(2)館内講座　42 講座を実施、参加者 1,265 名

・Ｒ４年度：36 講座 771 名

(3)ボランティア登録者数　34 名

・Ｒ４年度は 25 名

(4)ボランティア活動

・資料整理、講座の受付、広報活動、体験コーナー補助及び体験メニュー開発と運営への参画

(5)ボランティア増加の取組

・ボランティア参加者の個性や興味関心に合わせたボランティア活動の推進

分 析	(1)出前講座は市町村の要請に基づき計画、実施した。胎内市、聖籠町等遠方まで講座を提供できた。参加者の満足度は高い。 (2)館内講座は安定した参加者を確保し、満足度が高い。 (3)ボランティア登録者は感染症が５類に移行したこともあり増加した。 (4)ボランティア活動については、感染症による制限をなくし、通常の活動を行っている。 (5)中学生ボランティアは長岡市内（周辺地域を含む）の中学生（１～３年）を対象として募集したが応募がなかった（Ｒ６年度は２名の応募あり）。
課 題	(1)出前講座：実施方法の変更の周知（実施希望者が旅費を負担） (2)館内講座：新規参加者及びリピーターの獲得と維持、情報機器の老朽化による運営に係る支障の発生 (3)ボランティア：ボランティア参加者と博物館の双方にメリットがある活動の検討 (4)中学生ボランティア：近隣中学校と連携した参加を促すための取組
取組に対する自己評価	評価できる　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留

Ⅱ　評価委員会による検証・評価	
取組に対する全体的評価	評価できる　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留
評価のコメント及び今後の課題方向性等の提言	・出前講座については、令和４年度の 22 回 543 人に対し、令和５年度の 32 回 618 人は評価できる。満足度 97%と非常に高い数値を出していることも評価できる。また、令和５年度は胎内市、聖籠町等遠方での講座を行ったことも評価できる。今後とも市町村に積極的に広報を重ね、特に来館が困難な地域での生涯学習を推進することを期待する。 ・館内講座については、令和４年度の 36 回 771 人に対し、令和５年度は 42 回 1265 人と大幅に増加したことは評価できる。満足度に関しても 95%という高水準であり評価できる。 ・ボランティア活動延べ人数に関しては、令和４年度の 258 人に対し、令和５年度の 440 人は評価できる。活動参加の意識がコロナ禍前に戻ってきたと思われる。内容については、案内解説や資料整理・体験メニュー開発等、様々なニーズに対応できるように、活動の幅を広げることを期待する。

活　動　評　価　表

機能・取組分野	連　携	学芸課・経営企画課
取組方針	・県内各地の歴史・文化的価値の再発見と活用を支援し、地域づくりに貢献する。 ・幅広く近隣施設や団体とのネットワークを強化する。	
主な実現方策	・新潟県の中核機関として、地域史研究や資料保存活動を推進する。 ・各種団体との事業共催等による連携を模索する。	

Ⅰ　博物館による自己点検と評価

取組実績

○　［評価指標］地域史研究ネットワーク事業数

令和４年度	**令和５年度**		令和９年度
実績	**目標**	**実績**	目標
２件	**２件**	**１件**	２件

○　［評価指標］地域団体活動への参画件数

令和４年度	**令和５年度**		令和９年度
実績	**目標**	**実績**	目標
9	**15**	**10**	15

(1)地域史研究ネットワーク
・事業として IPM 研修の実施。（県内各機関に研修への参加を周知）
この他、定期的に以下の研究情報提供を行っている。
・新潟県地域史研究ネットワークニュースの発行（月１回）
・研究紀要に新潟県関連の文献目録を掲載（年１回）

(2)移動展　２件　三光石とやきもの
高校生アカデミックインターンシップ研修成果展

(3)展示協力　10 件　国立歴史民俗博物館など

(4)研究協力　18 件　学会役員、自治体文化財審議会委員など

(5)高等教育機関講師派遣　14 件（新潟大学・長岡技術科学大学・長岡造形大学・新潟産業大学・長岡崇徳大学・長岡大学）

(6)博物館実習受け入れ　６名

(7)新潟県立歴史博物館友の会
・友の会主催展覧会「第 20 回マイ・コレクション・ワールド」（３月）
・映画上映会「生きる 大川小学校 津波裁判を闘った人たち」（３月 10 日）

(8)県内各種イベントでの体験ワークショップ
・長岡まつり「観光ふれあい広場」投扇興

(9)伝統芸能上演会
・実施せず

(10)その他の関係団体
・信濃川火焔街道連携協議会、関原町サイノカミ有志の会、kid's 考古学研究所、上三光清流の会、新潟県石仏の会、福島しあわせ運べるように合唱団、表千家われもこうなど

(11)リピーター割引の実施
・馬高縄文館、近代美術館、雪国植物園、越後丘陵公園など近隣施設や万代島

	美術館、自然科学館などの県内美術館博物館の半券を提示することで当館の企画展観覧料を２割引とし、連携している。 (12)その他 ・関原町サイノカミ有志の会と協働して、平成 12 年度(2000 年)から毎年サイノカミを開催している。
分 析	(1) 地域史研究ネットワークは定期的に新潟県の地域史に関する情報を集約し、県内の研究者に好評である。 (2) 県内文化財関係組織団体等に対して学術的のみならず多方面で協力等を行っている。 (3) 新型コロナの５類移行に伴い徐々に元に戻りつつあるが、未だ制限のある団体もある。 (4) 連携可能な団体とのつながりをより深めるため、例えばサイノカミでは地域の親子とともに前日準備を行う活動を新設する等、地域の伝統的な活動を持続可能なものとし質的向上を図る新たな取組を進めた。
課 題	(1) 県内のセンター的役割として地域史研究の牽引役を務めること。 (2) 地域の文化団体等との一層の連携や新規団体の開拓
取組に対する自己評価	評価できる　[やや評価できる]　やや評価できない　評価できない　判断保留

Ⅱ　評価委員会による検証・評価	
取組に対する全体的評価	評価できる　[やや評価できる]　やや評価できない　評価できない　判断保留
評価のコメント及び今後の課題方向性等の提言	・新型コロナが５類に移行したとはいえ、その影響が残る状況下で、数値化することに時間がかかる 2 つの評価指標とも目標数を下回ったことはやむを得ないであろう。 ・コロナ禍を乗り越えて 20 回も続いている友の会主催の「マイ・コレクション・ワールド」を開催できたことや、平成 12 年（2000 年）から関原町有志の会と協働して継続してきた「サイノカミ」という地域の伝統的な活動を持続可能なものとする取り組みは評価できる。 ・様々な手段・手法を用いて、既存の団体等とさらなる連携強化や新しい試みで連携可能団体とのつながりを深めるなどで実績をあげ、評価指標の目標数に近づけてもらいたい。

活　動　評　価　表

機能・取組分野	情報発信／情報発信	経営企画課
取組方針	・当館の活動について、県民認知度を高める。 ・本県の歴史・文化的魅力を県外・海外にアピールすることで、交流人口の増大への寄与を図る。	
主な実現方策	・リピーターや新規来館者の拡大に向けた広報の展開。 ・IT やマスコミを活用した情報発信の充実を図る。 ・県外客誘致のための広報に努める。 ・観光事業団体との連携を強化し誘客に努める。	

Ⅰ　博物館による自己点検と評価

取組実績

○　［評価指標］新聞・雑誌・テレビ等に報道掲載された件数

令和４年度	**令和５年度**		令和９年度
実績	**目標**	**実績**	目標
211/110/200	**200/100/150**	**200/129/181**	200/100/150

○　［評価指標］館ホームページへのアクセス件数

令和４年度	**令和５年度**		令和９年度
実績	**目標**	**実績**	目標
118,205 件	**100,000 件**	**110,625 件**	120,000 件

(1)報道掲載

新聞・雑誌・テレビともに目標値を達成した（ただし新聞は、新潟日報・長岡新聞及び取材・掲載依頼が直接あった新聞社のみの数値）。

(2)インターネット

・ＨＰアクセス数は目標を上回った。

・公式ＳＮＳ（X, Facebook, Instagram）を活用し、定期的に情報発信した。
※R６．３月末時点での各フォロワー数。() はＲ５．３月末の実績値。

・X：13,895（13,453）　、Facebook：1,924（1,881）、Instagram：2,125（1,959）
※R６．３月末時点での各投稿数（１ヶ月平均）は以下のとおり。() はＲ４年度。
X：38 件（41 件）Facebook：36 件（35 件）、Instagram：36 件（35 件）

分　析

(1)新聞・雑誌・テレビなどで取り上げられる件数は目標値を維持している。
(2) 各ＳＮＳ投稿数は、１日１回程度の投稿を維持している。

課　題

(1)広報関係予算の確保
(2) ＳＮＳ及びＨＰによる積極的な情報発信の継続
(3)セキュリティ対策の充実

取組に対する自己評価

評価できる　　やや評価できる　　やや評価できない　　評価できない　　判断保留

Ⅱ　評価委員会による検証・評価

取組に対する全体的評価	評価できる　やや評価できる　やや評価できない　評価できない　判断保留
評価のコメント及び今後の課題方向性等の提言	・令和５年度は、「新聞・雑誌・テレビ等に報道掲載された件数」、「館ホームページへのアクセス件数」のいずれの評価指標とも目標を上回った。このところ両指標とも目標超えが続いており、職員の継続的な努力のたまものと評価したい。既存のメディアを通じた発信、ホームページや公式ＳＮＳを使った館自身による発信はともに、館の取り組み、魅力をアピールする上で重要な役割を果たしている。発信する情報の内容、見せ方などについても工夫、改善を怠らず、来館者数の増加や県民認知度のさらなる向上につなげてほしい。

活　動　評　価　表

機能・取組分野	管理運営	経営企画課
取組方針	・運営方針を館職員で共有し、方針を意識しながら博物館活動を進める。 ・目標の実現に向けた効率的な運営を行う。 ・来館者への安全・安心の提供に努める。	
主な実現方策	・自己評価・外部評価の実施。 ・評価結果の的確な反映による PDCA サイクルの確立。	

Ⅰ　博物館による自己点検と評価

取組実績

○　［評価指標］全体収支比率

令和４年度	令和５年度		令和６年度
実績	目標	実績	目標
3.5%	5%	5.3%	5%

○　［評価指標］（評価指標項目の達成率）

令和４年度	令和５年度		令和６年度
実績	目標	実績	目標
65%	100%	85%	100%

※指標 20 項目中、17 項目達成

(1)新型コロナの５類移行に伴う来館者の増加に対応するため、業務内容を再確認しながら安定的な館運営に努めた。
(2)運営方針に沿って活動に取り組んだ。また、同方針に基づく検証・評価を継続した。
　・活動評価表の作成及び経営会議での議論等による自己評価
　・外部評価委員による検証と評価
(3)月各１回の課内会議、経営会議、全体会議を連動させ、館運営や活動の情報共有及び進捗管理に努めた。
(4)施設管理について、保管、展示、来館者の安全確保に影響を及ぼさないよう、老朽化もしくは不具合が発生した設備・機器等の更新・補修を実施した。
(5)来館者の安全・安心確保、要望聴取に関しては、従前の日常的対応（業務日報・アンケート等）を継続した。
また、火災等に備えた防災訓練を３回行い、緊急時の速やかな誘導等初動対応の確認を行った。

分 析

(1)目標の設定・共有を図りながら進める、これまでの館運営の基本的な仕組みを継続し、定着・深化を図っている。

課 題

(1)新型コロナ感染拡大の影響により減少した入館者の早期の回復
(2)施設・設備の老朽化への対応（計画的な施設・設備等の更新及び補修の実施）
(3) PDCA サイクルを定着させ有効に機能させる。

付帯資料

令和5年度第1回新潟県立歴史博物館評価委員会
次第

令和5年 12 月 26 日（火）
10：00～
新潟県立歴史博物館研修室

1　開　会

2　議　事

(1)　令和5年度評価について
(2)　令和5年度事業概要について

3　閉会

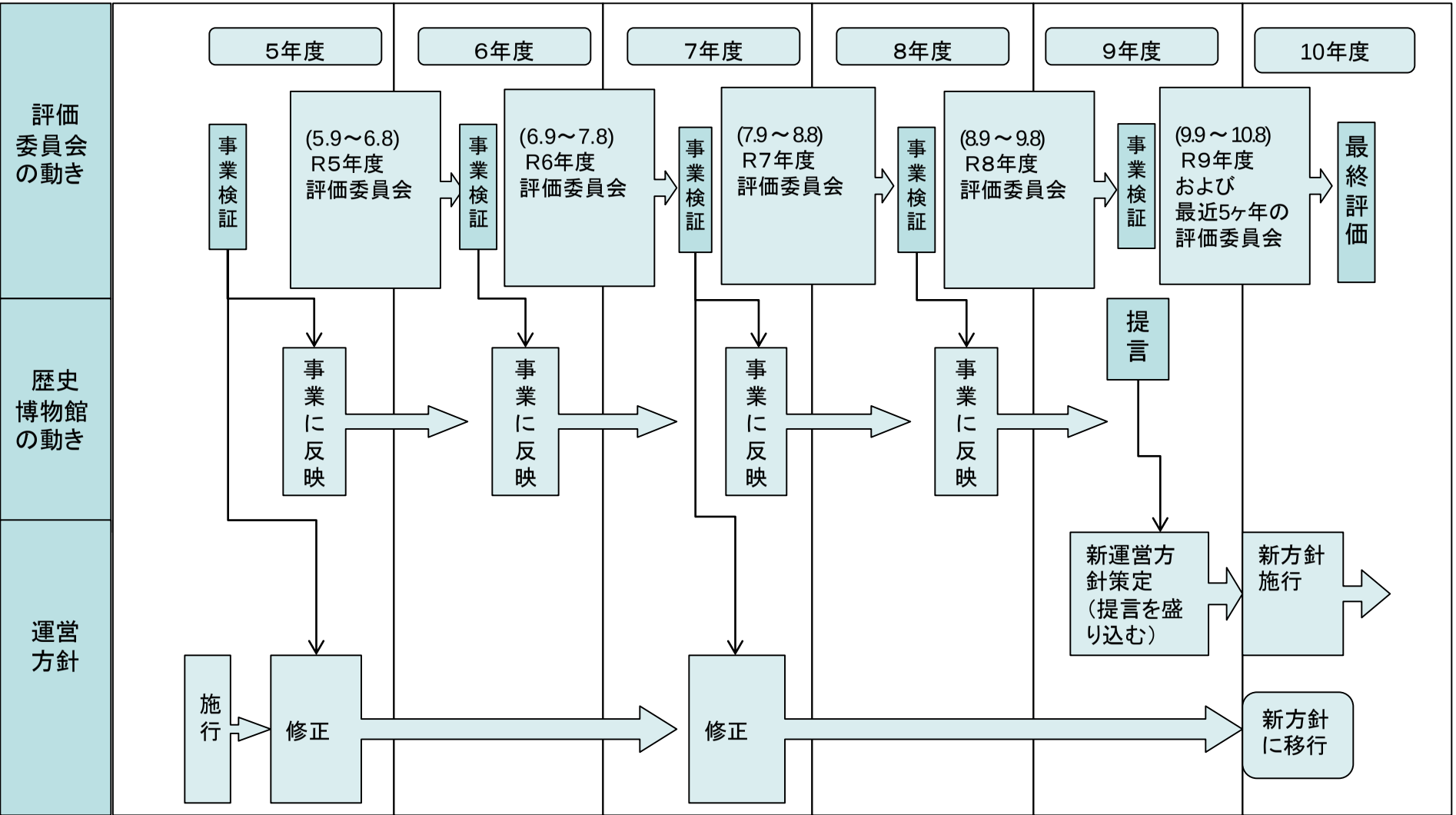
○配付資料

【資料1】新潟県立歴史博物館の評価委員会について
【資料2】令和5年度委員会スケジュール
【資料3】入館者状況
【資料4】学芸・交流普及事業概要
【資料5】評価報告書対応状況

新潟県立歴史博物館の評価委員会について

【基本的な考え方】

① 評価委員会では、毎年度、5か年運営方針の取組状況について「事業検証」を行う。
② 毎年の事業検証において、適宜提言を受ける。
③ 5か年運営方針は評価委員会の事業検証及び提言に基づき修正を加える。（7年度を予定）
④ R9年度の評価委員会の提言は、R9年度中に受け、R10年度からの新運営方針に盛り込む。



令和5年度県立歴史博物館評価委員会　スケジュール

		会　議	中間報告	内　容
R5	12月 26日	第1回委員会		委員会スケジュール説明 取組状況説明
R6	1月			
	2月	(第1回検討会)		5年度実績確認
	3月			
	4月			
	5月	第2回委員会		自己評価最終報告 評価確認 R6年度事業説明
	6月	第2回検討会	素案検討	報告書案持ち寄り検討
	7月			
	8月		報告書完成・提出	

歴史博物館　観覧者、観覧料収入の状況

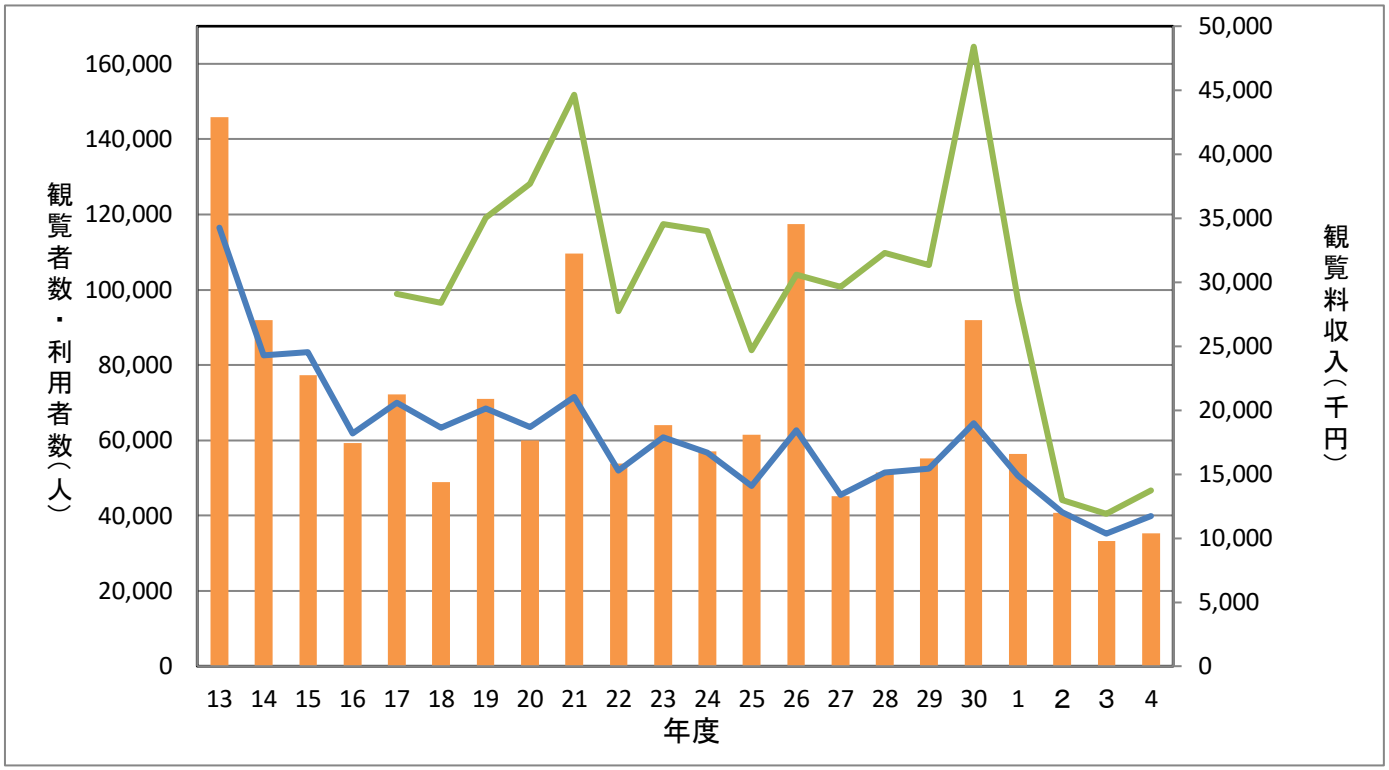
1　観覧者数・観覧料収入

（H12～H14.9の間は未就学児をカウントせず）

年度	観覧者数	対13年度比	観覧料収入（千円）	対13年度比	利用者数	対17年度比	備考
13	116,485		42,900				
14	82,503	70.8%	27,051	63.1%			
15	83,454	71.6%	22,735	53.0%			
16	61,754	53.0%	17,422	40.6%			10.24～12.20中越大震災のため休館
17	70,057	60.1%	21,232	49.5%	98,864		
18	63,315	54.4%	14,366	33.5%	96,592	97.7%	
19	68,491	58.8%	20,896	48.7%	119,203	120.6%	7.16～23中越沖地震のため休館
20	63,510	54.5%	17,615	41.1%	128,118	129.6%	
21	71,461	61.3%	32,252	75.2%	151,801	153.5%	
22	51,987	44.6%	15,856	37.0%	94,271	95.4%	
23	60,788	52.2%	18,821	43.9%	117,425	118.8%	
24	56,665	48.6%	16,774	39.1%	115,639	117.0%	
25	47,791	41.0%	18,062	42.1%	83,915	84.9%	H26親鸞展前売券分5,000千円を含む
26	62,737	53.9%	34,535	80.5%	103,990	105.2%	
27	45,491	39.1%	13,271	30.9%	100,718	101.9%	
28	51,467	44.2%	15,130	35.3%	109,847	111.1%	
29	52,423	45.0%	16,231	37.8%	106,489	107.7%	
30	64,596	55.5%	27,046	63.0%	164,556	166.4%	共催展覧会入館者52,235人
1	50,521	43.4%	16,578	38.6%	97,274	98.4%	
2	40,843	35.1%	11,980	27.9%	44,197	44.7%	
3	35,212	30.2%	9,787	22.8%	40,472	40.9%	
4	39,836	34.2%	10,372	24.2%	46,649	48.3%	

※観覧者数　有料者　＋　無料者（未就学、小中、免除者）

※利用者数　常設観覧者数＋企画観覧者数＋館内活動（講演会、イベント等）・館外活動（出前講座、授業等）参加者数



R5 入館者状況

10月末現在	R4年度	R5年度
常設展観覧者	21,867	25,680
企画展観覧者	8,932	15,780
その他利用者	1,771	2,694
収入	7,524千円	14,189千円

企画展開催中の企画展観覧者割合

	R4	R5
春季	44%	42%
夏季	53%	72%

資料４

令和5年度事業概要（学芸課）　令和5年 11 月末集計

１．企画展事業

a)　春季企画展 「伝える－災害の記憶 あいおいニッセイ同和損保所蔵災害資料」
4 月 22 日（土）～6 月 4 日（日）
同和火災（現あいおいニッセイ同和損保）の 廣瀬鉞太郎氏が収集した 1400 点余りの災害資料から、過去の人々は一体どのように災害を記憶し、伝えようとしたのか紹介した。あわせて近世期に新潟県域で発生した災害に関する資料を展示した。

b)　夏季企画展 NST 開局 55 周年 「上杉景勝没後 400 年　上杉景勝　その生涯」展
7 月 15 日（土）～8 月 27 日（日）
戦国時代末期に越後・佐渡の統一を成し遂げたのち、豊臣秀吉に臣従し全国に名だたる大名へと成長した上杉景勝をとりあげ、ゆかりの文化財からその足跡を見直したもの。

c)　テーマ展　山の洲（くに）文化財交流展 「発掘が語る地域交流　フォッサマグナがつなぐ新潟 長野 山梨 静岡」 9 月 9 日（土）～10 月 15 日（日）
新潟、長野、山梨、静岡の中央日本 4 県サミット開催に関わる文化交流事業。旧石器時代から古墳時代にわたる各県選りすぐりの埋蔵文化財を通じて、「県の石」ヒスイなど 3 万年以上にわたって続く 4 県の交流を紹介した。

２．調査研究事業

a)　科研費取得状況

◎研究代表

＜新規＞なし

＜継続＞5件

・基盤研究（C）「佐渡金銀山技術書群の分析に基づく鉱山資料の集成と鉱山社会史の解明」（2022～2025年度）

・基盤研究（C）「本州中央部の大規模遺跡の再検証に基づく更新世終末の動物資源利用行動の評価」（2020～2023 年度）

・基盤研究（C）「史資料原本調査を中心とした中世文書群の伝来に関する研究」（2020～2023 年度）

・基盤研究（C）「越佐徴古館」構想の復元を通した「横田切れ」水害被災地の復興」（2020～2023 年度）

・基盤研究（C）「近世産業絵巻の基礎的研究」（2019～2022年度、2023年度延長）

◎研究分担

＜新規＞3 件

・挑戦的研究（萌芽）「型式学と AI を融合したデータ駆動型研究基盤への挑戦」（2023～2025 年度）：新潟国際情報大学

・基盤研究（B）「更新世末の北海道における尖頭器製作・使用行動に関する総合的研究」（2023～2026 年度）：北海道大学

・基盤研究（B）「更新世末から完新世初頭における先史狩猟採集民の生態資源利用をめぐる研究」（2023～2027 年度）：静岡大学

＜継続＞3件

・基盤研究(B)「越後縄文人の食性変化と多雪化の関係を明らかにする研究」(2020～2023 年度):東京大学

・学術変革領域研究(A)「土器製作技術と植物性混和材」(2020～2024 年度):千葉大学

・基盤研究(B)「須恵器 3D-RGB データの深層学習クラスター解析による型式・年代分類基準の検証」(2022～2024 年度):新潟国際情報大学

その他外部研究費取得状況

なし

b) 論文等

・専門書・専門誌への論文等その他: 12 件

・調査報告書・辞典・参考書等: 7件

・一般書・一般雑誌・新聞等: 6件

・学会発表等: 6件

・講演等: 12件

・展示協力等: 25件

・高等教育機関(大学等)への年間講師派遣等 : 19件

３．常設展示

常設展示ワンポイント解説

・参加者数: 540 名／ 67回(うち、ゲスト解説6回)

常設展示資料替え

・4 月実施: 35 件の資料を入れ替え

・10 月実施: 32 件の資料を入れ替え

４．資料収集保管事業

a) 資料寄贈:8件

b) 資料寄託:1件

c) 新規データ登録件数: 4件

d) 新規データ公開件数: 0件

e) 公開データ更新件数:1,899 件

f) 保存環境:大きな事故なし

・IPM 研修実施:4月2回、9月1回、10 月1回

・日常点検継続

・常設展示室内殺虫作業:6 月実施

・収蔵庫内空気環境調査(パッシブインジケータ、イオンクロマト法による)

・企画展示室展示ケース等環境調査(温湿度、パッシブインジケータ)

・収蔵庫清掃実施、点検は毎月実施

令和5年度事業概要（交流普及）　　令和 5 年 11 月末集計

（１）講座

当館研究員の「調査・研究」活動の成果を広く県民に普及する場として、また、県民の多様なニーズに即した生涯学習の場とするため、講座を開講している。館内講座・出前講座合わせて692人の参加を得た。

１）館内講座

講座を 31 回開催し、合計で 692 人の参加を得た。

館内講座	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
実施回数	56	44	43	43	41	48	48	44	48	40	24	38	23	31
参加者数	3,075	2799	2,643	2,749	1,746	2,099	3,044	1,620	3,326	3,743	402	710	479	692

＊実施内容：古文書講座、体験型講座、企画展関連講座　など

２）出前講座（17 年度以降実施）

11 市町村で計 29 回にわたり開催し、合計で 564 人の参加を得た。

出前講座	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
実施回数	10	16	16	19	15	17	18	19	23	22	16	33	16	29
参加者数	441	504	838	656	404	648	529	707	745	559	364	914	381	564

＊実施内容：「戦国時代の女」「お菓子と新潟」「井上円了の妖怪学」　など

（２）体験プログラム

日曜日の午後に実施。会場は、常設展示室内にある体験コーナーで実施。

42 回実施し、合計で 947 人の参加を得た。

館内講座	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
実施回数	114	115	125	118	113	116	125	120	114	117	33	22	42	42
参加者数	2,920	4,044	5,376	3,294	2,768	3,518	4,671	4,581	4,435	6,087	586	249	592	947

＊実施内容：まが玉作り、縄文コロコロ体験、試着体験　など

（３）学校団体（視察を含む）受け入れ

受け入れた学校団体（視察を含む）は、延べ小学校 96 校 4,654 人、中学校 27 校 1,590 人、高校3校 11 人、特別支援学校 24 校 231 人、大学 14 校 185 人、その他 119 団体 1757 人（うち幼稚園・保育園3団体 133 人）であった。

団体受入	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
学校団体数	218	224	210	231	202	215	220	224	243	220	178	192	143	164
小学校	169	181	158	175	150	145	160	158	150	140	115	118	81	96
中高大特校	49	43	52	76	52	70	60	66	93	80	63	74	62	68
その他	187	164	168	143	309	239	200	167	189	150	155	136	108	119

（４）出前授業

県内の小学校・中学校・高等学校から出前授業の要請があり、7校8回にわたり実施した。

	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
実施回数	13	10	8	17	26	16	19	22	21	27	15	14	5	8

＊授業内容：まが玉作り、火起こし、歴史資料を読み解く授業、戦争関係についての体験・授業等

（５）職場体験

県内の中学校から依頼があり、6校 32 名を受け入れた。（体験生徒数は延べ人数）

	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
来館校数	7	9	9	9	4	5	5	9	8	6	1	3	6	6
体験生徒数	18	35	33	24	27	34	32	73	39	35	9	20	41	32
実施延べ日数	12	17	17	19	9	12	13	20	16	15	3	7	9	11

＊体験内容：体験活動の準備、受付体験、バックヤード見学、拓本体験、SNS体験等

資料５

令和４年度博物館評価報告書を受けて

評価：Ａ＝評価できる、Ｂ＝やや評価できる、Ｃ＝やや評価できない、Ｄ＝評価できない、Ｅ＝判断保留

機　能	取組分野	令和４年度　二次点検（外部評価）		評価を受けて
		評価 上：自己 **下：二次**	主なコメント	
総　　括		B	・企画展開催費をはじめとする予算削減や事務職員の削減など、厳しい環境を強いられる中、各項目において知恵と工夫で全般的によい成果を上げている。 ・企画展予算が以前の４回分から２回分へと減少し、結果として館蔵品や近隣施設との連携による「テーマ展示」を企画展示室で開催して減少分を補っている。しかし限られた人員でできることには限界があり、いつまでこの状態を維持できるのか心配もある。 ・コロナ禍も落ち着き、これまで制限していた従来の多くの活動も復活した。利用者数も昨年度よりは増加した。しかしながら懸念されるのは、令和２年度の観覧料徴収方法の変更以来、入館者が常設展か企画展のどちらかしか見ない現象が常態化しつつあることである。観覧料収入としては導入以前とほぼ同じというものの、とりわけ企画展の観覧者は10%ほど落ち込んだ。本県の歴史や民俗を伝える活動がなされているにもかかわらず、県民の目に触れる機会が減ったことは残念である。SNS の発信など、県民との接点を増やす努力がなされているだけに、観覧料徴収方法の変更に伴って、展示という博物館機能の中でも重要な活動が益々県民から遠ざかる現状は憂慮される。 ・他方、館側には県民への更なる歩み寄りもあってよいかと思われる。もちろん単なる迎合はよくないが、本県の隠れ	・令和２年度の観覧料徴収方法の変更が、観覧料収入の増加に必ずしもつながっておらず、企画展の観覧者数の減少と招いているとの懸念もあることから、担当部局に徴収方法変更の見直しの協議を求めているところです。 ・本県の歴史を通じた魅力の発掘、県民への提供は、当館の大切な機能の一つと考えており、その効果的な取組方法、手法は引き続き検討していきます。
		A		

			た歴史や魅力を発掘し、それを平易な形で提示する努力を続けることによって、当館の活動の意義が県民にさらに伝わるのではないか。 ・最後に、展示や講座などに対する現在のアンケート調査の方法については、再考の余地があるのではという意見が複数の評価委員から出されていることを付言しておきたい。	
収集・保管	収集・保管	B	・評価指標はデータベース公開数の目標が達成できていない。丁寧な資料整理を心がけつつ、計画的に公開を進めてほしい。 ・保存に関する調査測定点検や、IPM 研修等、様々な活動を行い、良好な保管環境を維持している。また、継続的に職員の知識向上を図っており、大いに評価できる。 ・博物館の基本理念、収集方針に則った上で、購入など様々な収集方法を検討できる環境が望ましい。収蔵庫のスペースを考慮しつつ、今後も中長期的な視野で収集・保管計画を立ててほしい。	・計画的な資料整理、データベースの公開は、県民へ研究成果等の還元の一つであることから、着実に取り組んでいきます。 ・県の財政状況では、資料購入費の大幅増は見込めないところではありますが、今後も売り立て等の情報収集を継続していきます。
		B		
展示	常設展示	A	・来館者減少などコロナ禍以降の影響がまだ残っている中、特集展示、ワンポイント解説共に、実績は目標値をクリアしている。 ・固定した常設展示の中で、定期的な資料展示の入れ替えや特集展示を行い、マンネリ打破への取り組みが行われている。また、展示の保守点検、展示方法の改善等は変わらず行われており、これらの継続的で地道な取り組みは評価できる。 ・令和 2 年度から導入されたスマートフォン用解説アプリは、充分に活用されているとは言えないが、時代に対応する積極的な取り組みであり、活用が広がるよう試行を続けてほしい。また、スマートフォン用解説アプリには抵抗を感じる世代の来館者も多く、従来の音声ガイドの需要はまだま	・音声ガイドは、観覧者の満足度向上に必要と考えていますが、現在の機器は開館当初からのもので、すでに修理対応ができない状況です。今後、サービスの提供に支障を来すことのないよう、対応を検討していきます。 ・また、音声ガイドとして新たに導入しているスマートフォン用解説アプリは、利便性の高いものであると考えており利用促進に取り組んでいきます。
		A		

			だ続いているとのことであるが、音声ガイド機器の故障などもあり個数が 8 割ほどに減ってしまっているとのこと。音声解説は重要なサービスなので、引き続き充実に努めていただくよう期待したい。	
	企画展示	A A	・予算が減額されたことで、令和元年度までは年 4 回開催されてきた企画展が、令和 4 年度は 2 回になったことは残念である。しかし、その代替として、館の所蔵品や資料などを活用し開催しているテーマ展示を 2 回実施していることは評価できる。 ・令和 3 年度、令和 4 年度とも新型コロナの影響を受けながら、2 つの評価指標とも目標数値を上回ったことも評価できる。 ・令和 4 年度の冬のテーマ展示「大河津分水と信濃川の治水」は、大河津分水の通水 100 年という時宜を得た企画で評価したい。 ・今後の新しい状況下で、来館者の関心を意識し、集客を増やせる企画展やテーマ展示の実施を期待する。	・新型コロナウイルス感染症の５類移行を受け、人々の活動範囲も広がることから、この機を逃すことのないよう、県民のニーズや時期的にタイムリーなテーマを意識した企画を考えていきます。
調査・研究	調査・研究	A A	・科学研究費をはじめとする外部資金の獲得数は目標の倍であり、本館の調査・研究が学術的に高く評価されている。また、学会等での口頭発表回数も目標値を上回っている。これまでコロナ禍のために発表の機会が制限されがちであったが、それもほぼなくなり、本来の活動が可能になったものと思われる。 ・論文等執筆件数は目標値に達していない。しかしながら、目標値設定当初と比べて人員が減少していることを鑑みれば、39 件という数字は決して低くはない。 ・「論文等」には企画展（「生業絵巻尽ーひらけ！江戸の産業図鑑」）の図録も含まれているとのことである。学芸員の研究成果を展覧会という形で発表するだけでなく、それを図録	・当館は県内の博物館で唯一、科学研究費補助金交付の研究機関であり、その調査・研究が高く評価され、期待されていることから、引き続き外部資金の獲得に努めます。加えて、科研費以外の様々な助成金等の獲得にも挑戦していきます。 ・論文等の執筆活動は研究成果の還元の一つであることから、状況の変化はあるものの、積極的に取り組んでいきます。

			として残すことも、公立博物館の大きな使命である。それゆえ、図録の作成、そしてそこへの論文執筆は、とりわけ高く評価できよう。	
教育・普及	学校教育	B	・新型コロナの影響により、利用をちゅうちょする学校が多くあったと推測される。その中でも県内小学校 440 校のなか 96 校、約 9,000 人の学校団体の利用があった。令和 3 年度は約 8,000 人ということを考えると、評価できる。今後も利用促進の広報活動を展開してほしい。 ・体験プログラムについては感染拡大が懸念されるなかで、目標回数を越えたことは評価できる。また、体験活動の満足度は常に高いことも評価できる。今後も新規のプログラムを開拓するなど、積極的な体験活動を期待する。 ・出前授業の依頼が減少しているのは新型コロナの影響によりやむを得ないことであるが、令和 5 年度は利用のニーズは回復していくことが見込まれる。企画展をきっかけにしたテーマでの出前授業を開拓するなど、新たな取組に挑戦してほしい。	・県内小学校利用率は、新型コロナウイルス感染症の５類移行を受け、利用率の向上が期待できるものの、同時に活動範囲の拡大により他施設利用への変更が懸念されることから、さらなる利用促進に取り組んでいきます。 ・また、出前事業ついても同様、これまで実績のなかった校でも実施できるよう、引き続き内容や方法を検討していきます。 ・体験プログラムは、新規のプログラムの導入を進め高い満足度の維持に努めていきます。
		A		
	社会教育	A	・新型コロナの影響により、出前講座の回数、人数ともに減少したことは当然である。令和 3 年度からは減少したとはいえ、22 回実施、543 人の参加者は評価できる。また、満足度が毎年 90%を超えていることも評価できる。今後も市町村に積極的に広報を重ね、特に来館が困難な地域での生涯学習を推進することを期待する。 ・館内講座に関しては、コロナ禍で人数制限をしていることもあり、人数の増減による比較は困難である。満足度に関しては 96%という高水準であり評価できる。人数制限が無くなった時の参加者の増を期待する。 ・ボランティアに関しても、館内講座同様、コロナで活動停止あるいは縮小せざるを得ない状況が続いているため、人	・出前事業、館内講座、ボランティア活動はともに、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて活動が制限されて、特に館内講座は定員を減員しながらも実施してきました。５類移行に伴い、高い満足度を維持しつつ、県民のニーズを探りながら、内容の充実に取り組んでいきます。
		A		

			数の増減による比較は困難である。人との関わりが多い案内解説等の対人の活動から、資料整理やメニュー開発等、人との関わりを持たない活動も視野にいれる必要がある。また、コロナ禍が開けた後は、徐々に従来の活動を再開してほしい。	
連携	学術面の連携	A A	・地域史研究ネットワーク事業数、展示協力等他機関との連携事業は、どちらも目標を達成しており、評価できる。 ・「移動展」、「展示協力」、「研究協力」、「高等教育機関講師派遣」など、県内外の様々な団体と協力を図っている。今後も工夫をしつつ、主体的に連携を推進していただきたい。 ・課題として挙げている「地域史研究ネットワーク参加団体向け研修の定期化」は、コロナ禍明けの事業として積極的に行ってほしい。新潟県の中核博物館としての自覚を持った自発的な事業の実施が望まれる。	・県内外の諸機関との連携を深めていくとともに、今後とも県内における歴史研究のセンター的役割を果たしていきたいと考えています。
	地域づくりに向けた連携	A A	・地域連携に欠かせないイベントや事業が新型コロナの影響で多くが中止となるなど厳しい状況下で、評価指標である共催事業等による連携団体数が目標数を大きく下回ったことは仕方のないことであろう。 ・新型コロナ禍にあって、19 回も続いている友の会主催の「マイ・コレクション・ワールド」を開催できたことや、2000 年から関原町有志の会と協働して継続してきた「サイノカミ」を実施したことは評価できる。 ・新型コロナも新しい段階に入ったので、様々な手段・手法を用いて、来館者の増加に結びつくように様々な分野の団体等と連携強化を図ってもらいたい。	・これまでも友の会や地元の町内有志と連携した展覧会やイベントをはじめ、長岡まつりの昼行事への参加など、地域に根差した活動を行ってきました。 ・今年度に改正博物館法が施行され、当館においても、新たに地域の多様な主体との連携・協力による文化観光などの活動を図り地域の活力の向上への取組が求められることから、限られたマンパワーや予算の中ではありますが、担当部局と協議、連携しながら、今後の取組を検討していきます。
情報発信	情報発信	A	・令和 4 年度は二つの評価指標とも目標を上回った。3 年度から専任職員が減り、人員が少なくなったなかで、3 年度に引き続いての目標クリアであり、高く評価するとともに	・ソーシャルメディアが進化している昨今にあって、外国人への情報発信を含めて、それらを活用した情報発信は必須であ

		A	職員の努力に敬意を表したい。中でも公式 SNS は１日１回の投稿を維持し、投稿数は 3 年度を上回った。新たな話題を提供し続けることがフォロワーの増加に寄与しているとみられる。今後もこうした SNS などでの情報発信に努め、館の魅力をアピールし、来館者数や満足度のアップにつなげていってほしい。	ると考えています。厳しい予算状況やマンパワーではありますが、他館の状況を参考にしながら、効果的な手法を追求し続けていきたいと考えています。
―	管理運営			

令和５年度第一回評価委員会　議事録

令和５年 12 月 26 日
10 時～12 時
歴史博物館会議室

出席者：金山委員、小林委員、宍戸委員、内藤委員、山本委員、湯淺委員、廣井課長補佐、
小原館長、反町副館長、浅井学芸課長、山田経営企画課長、松谷研究員、西田研究員、
渡邊（文化課）

事務局
これより第一回評価委員会を開催する。まず、文化課よりご挨拶申しあげる。

文化課課長補佐　挨拶趣旨
年末の時期にご参集いただいたことに感謝申しあげる。県民に親しまれる開かれた博物館となるよう課としても魅力向上や賑わいづくりに取り組みたいと考えている。専門の見地から忌憚のないご意見を伺いたい。

館長挨拶趣旨
これまでも、評価委員会からはさまざまな評価や提言をいただいたほか、時には現況をとらえて応援団にもなっていただき心強く思っている。評価委員会が博物館の運営にあたって欠かせないものと認識しており、今後とも忌憚のないご意見をいただきたい。

事務局
つぎに、委員長、副委員長の選任に移る。立候補される委員がなければ事務局としては、宍戸委員を委員長、山本委員を副委員長にお願いしたい。

（委員　異議無し）

事務局
では、委員長に議事をお願いする。

委員長
新任であるが、よろしくお願いしたい。まず簡単な自己紹介から始めたい。

（委員　自己紹介）

委員長

次に、資料に基づき説明をお願いする。

事務局
今年度は博物館が作成した 5 ヶ年計画の初年度にあたる。設定した指標にもとづき、博物館が自己評価を行い、評価委員会が 2 次評価をするという仕組みである。年度がかわってから、博物館から出た自己評価を、評価委員会が評価し、8 月に報告書を作成するというスケジュールになる。最初の頁に五ヶ年のスケジュールが書いてあるが、その間に社会情勢や博物館の状況変化により、評価指標を変更することもあり得る。今年度のスケジュールを次の頁に示している。本日の委員会の後、年度末に検討会が予定されている。実績の中間報告の他、委員からの要望があれば、館の実情についてざっくばらんに話を聞いていただく会である。その後 5 月か 6 月にもう一度、評価委員会があり、博物館の評価に基づく 2 次評価をしていただき、第 2 回の検討会でコメントを持ち寄っていただき、最終的な報告書を作成していただくというスケジュールである。

委員長
今の説明について、質問はあるか。

A 委員
第一回検討会に括弧がついているのはどういう意味か。

事務局
資料作成時には委員に集まっていただくか、こちらから説明に回るか不確定であった。

委員長
まだ、検討会を行うか決定できないということか。

事務局
旅費の確保ができるかの課題があったが、実施できると思われる。

委員長
次に移る。

事務局
資料 3 に来館者と収入状況の表がある。3 年ほど、感染症の影響で落ち込んでいたが、上向きの傾向が見えてきている状況である。今年度は特に夏の企画展が好評で多くの来館者を迎えることができた。

委員長
特に質問はないか。では、次をお願いする。

学芸課長
資料４の学芸課の事業概要を説明する。現在、年間企画展を 2 回、開催経費をかけられないテーマ展を 2 回開催している。春には巡回展であるが、あいおいニッセイ同和損保の資料による災害をテーマとした企画展、夏には上杉景勝の没後 400 年を記念した展覧会を開催した。これらが企画展である。秋にはテーマ展として、静岡・山梨・長野・新潟４県連携でそれぞれの考古資料を持ち寄って巡回する、「山の洲文化財交流」展、またイレギュラーながら先日まで文化庁助成金による研究を公表する「守れ！文化財」展を実施した。現在準備中なのが年明けから開催する「越後の木綿　いまむかし」展である。
今年度科研の研究代表として新規はなかったが、継続として研究代表５件、分担として新規３件、継続３件があった。論文については途中経過であり、年度末に増えると思われる。常設展の活性化を目的として週末にワンポイント解説を行っており、11 月末までに 540 名の参加があった。今年度は一時中断していた外部の方をお呼びするゲスト解説も復活させた。資料の入れ替え、寄贈寄託件数は資料の通りである。データベースのうち、新規公開は０であるが、これまでのデータを修正したものが 1,800 件ほどある。収集保管に関しては特に重大な支障は出ていない。

経営企画課長
資料の数字に誤りがあったので修正をお願いする。館内講座・出前講座合わせて 692 人となっているが、正しくは 1,511 人である。また館内講座の参加者が合計 692 人となっているが、947 である。表の数値も同様に 947 に訂正をお願いする。
講座は館内講座と出前講座の 2 本立てであり、館内講座は各研究員の研究成果や企画展と連動する内容で 947 人参加があった。出前講座については市町村教育委員会を通じて地域から開催要望を受け付けており、11 市町村の教育委員会、公民館などで開催した。体験プログラムは館の展示内容や企画展に連動した一般向けのもので日曜日午後に体験コーナーで開催している。令和２年度から数値が落ちているが、従来土日祝日に開催していたものを、令和２年８月より日曜のみ開催にしている。学校団体については、統廃合が進んでいることもあるが、今年度については新型コロナの影響から脱却しつつあると思われる。出前講座は学校からの要望を受けて館員が出向くもので、今年度は長岡市を中心に行った。職場体験は中学校から希望があれば受け入れている。内容などは資料の通りである。

館長
資料に誤りがあったことをお詫びする。

委員 A
企画展事業についてだが、企画展２、テーマ展２となった流れは理解しているが、すでにフォッサマグナの展示があり、これから冬のテーマ展が予定されている。「守れ！文化財」はどのような位置づけなのか。

学芸課長
守れ！文化財展は文化庁の補助金による事業で入館料を徴取できない展示であった。本来は、今年度は企画展２回と守れ！文化財、越後の木綿のテーマ展２つの予定であった。それに急遽、県の方からの指

示で山の洲文化財の展示が加えられることとなった。

委員 A
守れ！文化財展にはとても力が入っていた。これは文化庁の指示によるものか。

館長
５年間のプロジェクトに申請したものである。

委員 A
ポスター枚数も多くなく、よく知れ渡っていなかったようだが、内容には迫力があった。テーマ展ではないのか。

学芸課長
テーマ展の位置づけにはなっている。

委員長
企画展は企画展料金を徴収でき、テーマ展は常設展の料金とのことだが、どのように整理されているのか。

学芸課長
企画展は予算で開催経費が計上されているのに対し、テーマ展はそれがなく自前の努力で開催している。常設展の延長で、企画展示室を使っているという位置づけである。

委員長
企画の意思決定の過程は同じか。

学芸課長
３年計画で同様に企画を行っている。

委員 A
テーマ展は常設展料金での観覧ということだが、特に常設展に行かなければ無料と理解していた。

学芸課長
守れ！文化財は補助事業のため、常設展観覧料も必要なかった。

委員 A
テーマ展にはチケットはないのか。

館長
フォッサマグナ展ではチケットを作成し、常設展観覧料をいただいた。

委員長
経費がかけられないので、ポスターも少なかったようだ。

委員 C
令和５年度テーマ展は３回と考えていいか。

学芸課長
そうである。

委員 C
料金の徴収方法が変わったのはいつであったか。

館長
２年度からである。

委員 B
企画展、テーマ展の各展示で入場者の集計はできるのか。

館長
厳密ではないが受付の段階で目視で把握するようにしている。

委員 B
これまで最も人気のあったのはたとえば景勝展か。

館長
景勝展は１万２千人であった。もっと前にはさらに多いものがある。企画展については人数を把握している。

委員 B
それでデータ分析をして、次の企画展のテーマ設定に生かしていくのか。

館長
３年ペースで行っているので、即情勢を見極めて反映というのは難しい。展示の後に総括を行って、総括を踏まえて次の企画展に生かすという PDCA をきかせながらやってきている。

委員長
企画展は企画展チケットで入場者を把握できるが、テーマ展について、目視とのことだが、カウンターを使って集計していないのか。

経営企画課長
カウンターは使用している。

委員 A
テーマ展でもチケットを作っているのではないか。

館長
フォッサマグナ展についてはチケットを作成した。４県の連携のため、調整の中でそうなった。

委員 A
作ったり作らなかったりするのはおかしいのではないか。

館長
わかりにくいところはある。

西田
テーマ展はあくまで拡大常設展である。すこしでも話題を提供する必要があり、予算がなくても行っているものであることを理解いただきたい。

委員長
テーマ展の入り口には人はいないのか。企画展に何人、テーマ展に何人というデータを把握することは大事なことだ。来館者がどれだけ求めていることに応えているのか、把握するためだ。

経営企画課長
通常、テーマ展については常設展チケットの購入数を観覧者数としている。今年度に限ってはフォッサマグナ展についてはチケットを作成した。守れ！文化財展ではカウンターを使用した。

館長
課題は認識していて、把握は必要だと考えている。今は目視での確認を徹底しようとしている。

委員 A
テーマ展示を見た人が観覧料を支払ったかどうかは確認できないのか。

委員長

まず、入り口で入館券を買い、常設展を見に行く。あるいはテーマ展を見る。それが導線だが、その数をどうやって把握しているのか。

館長
チケットを販売した職員が目視をして、企画展を見たか確認する。

委員 A
副委員長の意見は？

副委員長
テーマ展を開催しているときは常設展チケットを購入した人は 99%がテーマ展にも行くと認識している。厳密に常設だけという人はほぼいないと思っているので、あまり問題意識はなかった。

委員 A
テーマ展を見た人がどれだけいるのか把握していないと評価のしようがない。

委員長
装置などを使えば、人間がいなくてもカウントする方法がありそうだ。

委員 C
利用者数内訳に常設、企画の数が出ているが、これはどの人数か。チケットを作成していない展示についてはカウントしていないということか。

西田
企画展のチケット購入者の数である。

委員 D
拡大常設展からテーマ展に名称が変わったところだが、他館からの借用による展示も多いようだ。予算も必要になりそうだが、つつがなく進められているのか。

学芸課長
館蔵資料だけでは実施できないものは県内の資料、かつ公用車で運搬できるものを借用して行っている。

委員 B
文化庁の補助による展示の話があったが、毎年は無理なのか。

学芸課長
100%の補助ではないものが多いので、手を挙げられるものはあまりない。守れ！文化財は 100%補助で

あった。資料借用のための補助もあるが、手持ちの資金も必要のことが多い。

委員 B
テーマ展では経費をかけないということなので、たとえば 1/2 の補助だと手を挙げられないということか。

学芸課長
それでは厳しい。

委員長
では資料５の説明をお願いする。

副館長
令和４年度にいただいた評価委員からのコメントへの対応状況を示している。表の右端に記載されているのが評価に対する対応である。総括については、観覧料徴収方法についてのコメントがあった。館としても担当部局に見直しについて協議を求めていきたい。収集保管については、データベース公開数が目標に達していない指摘があった。引き続き着実に取り組んでいくよう努めていく。展示については音声ガイドについてのコメントをいただいた。現状としては修理対応できないが、すぐに提供に支障をきたす状況ではない。対応の検討を続けるとともにアプリの利用促進に取り組んでいきたい。企画展については夏に久しぶりに１万人を超えた。３年計画での立案であるが極力ニーズに応えるタイムリーなテーマを意識して企画展を行っていきたい。調査研究では外部資金の獲得状況についてコメントをいただいている。科研費の獲得状況は当館の研究のレベルの証ととらえている。科研費だけでなくほかの助成金についても挑戦していきたい。成果公表にも取り組んでいく。教育普及について、学校教育では５類以降、活動範囲が拡大し他施設への利用変更も懸念されるところだが、博物館の利用促進をはかっていきたい。社会教育について、ボランティアはコロナの影響で活動制限を余儀なくされたところだが、順次再開している。館内講座も定員を減らしていたが、それを解除してこれまで以上に内容充実に努めていく。学術面の連携では引き続き県内における歴史研究の中心的存在となっていきたいと考えており、研修についても内容充実に努める。改正博物館法の施行により、地域の活力向上をもとめられているところであり、担当部局と具体的取り組みを検討していきたい。情報発信についてはよい評価をいただいているところである。外国人への情報発信、ソーシャルメディアの活用について重要だと考えている。人員の課題もあるが、効果的手法について検討していきたい。

委員長
質問、意見はあるか。
２ページの収集保管について B 評価で、理由としてデータベース公開件数が指標に達しなかったということが挙げられている。これについて方向性は述べられているが、具体的にいつまで何を行うのか。

学芸課長

現在公開データ数は 37,000 件である。データ化しにくい資料が残っている状況である。

委員長
この一年間で第１四半期にはここまでといった計画を立てることが改善につながるのではないか。全体からうけた印象だが、方向性だけでなく、具体的にいつまで何をするか答えることが大事だ。

委員 B
音声ガイドについてだが、サービスの提供に支障をきたすことのないよう対応を検討すると書いているが、更新していくということなのか、スマートフォンの活用をふくめた対応を考えていくということなか。

副館長
音声ガイドは修理ができない状況であるが、まだ数がある程度は確保できている。ただこのまま手をこまねいているわけにはいかないので、状況を見ながら更新を含めて検討をしていきたい。スマートフォンについては音声ガイドとは別に導入したもので、単純に補完できるものではない。

委員 B
スマートフォンによるガイドは全国的にも普及しているのか。

事務局
増えている。ただし、音声ガイドが必要なのは学校団体などにまとめて提供できる利点があるためである。子どもたちはスマートフォンを持っているわけではない。

学芸課長
開館当初 300 台を導入し、今、200 台以上残っていて、よほどのことがない限りは使える状況である。

委員長
残り何年くらいか。10 年くらいか。

副委員長
徴収方法の変更という箇所についてだが、自分が近代美術館にいたときにこの変更があった。これまで企画展料金で常設も見られたのが、来館者の負担が増えた。今後の見込みはどうか。

課長補佐
もともとは県の財政難をうけて、行財政改革が４、５年前にあり、使用料手数料を一斉に見直すことが行われた。必ずしもそれが成果に結びついていないことを課としても認識しており、協議を始めている。

委員長

増収に結びつかなかったというエビデンスが示されれば財政当局も応ぜざるを得ないか。

副委員長
新規体験プログラムの構想は具体的にどんなものか。

松谷
今年は冬のテーマ展で亀田縞のくるみボタンをつくるプログラムがある。以前やったことがあったと聞いているが久しぶりに行う。子どもができる体験を考えている。草履をつくるプログラムを試みたが難しく、別な案を考えている。

副委員長
学校現場が忙しくバスに乗って一時間かけて博物館にこられない状況がある。学校に来てもらって学校で体験できる面白いプログラムがあるとありがたい。

委員Ｄ
情報発信で外国人向けを含めてとある。具体的に外国人にむけての発信はあるのか。

松谷
ＳＮＳは外国人の方も見ているような話を聞いている。実際にＳＮＳを見てこられた外国人がいたと聞いている。

委員長
英語によるＳＮＳなのか。

松谷
日本語のものをみたようだ。

委員Ｄ
外国人に向けてといってもどこに向けてを考えているのか。

松谷
今はフェースブック、X、インスタグラムを使用している。一定の効果はあると認識している。興味を引くようなタグをこれからも考えていかなければならない。

委員長
どこの地域の人がどのくらい見ているのかをなんらかの方法で推定できる手法を工夫してほしい。

委員Ｂ

外部資金獲得の実績はどうなのか。科研費以外ではどのようなものがあるのか。

学芸課長
金額は入っていないが今年度の状況を先ほどの資料に示している。ほかでは民間の財団が募集しているものがある。大学との共同研究もあり、数年前には東大史料編纂所の資金を得た。また越後文書宝鑑集は新潟大学との共同研究で成果を新潟大学の資金で刊行している。

西田
研究員が 10～11 人で毎年科研費を５，６件取っているのは、割合として非常に高いと思う。

委員長
大学関係者としても評価できる。

委員 C
外国人について、来館者はどのくらいか。

西田
毎月数十人程度である。

委員 C
観光ツアーで来ているのか。

西田
来館動機は不明である。観光案内は特に行っていない。

委員長
企画展示について、ニーズや時期的にタイムリーなテーマを意識してとある。３年がかりの計画だそうだが、タイムリーにできるのか。

副館長
テーマは大きく変えないにしても、内容、手法についてなるべくタイムリーなものにする検討をしていきたい。

委員長
館として、県の観光部署として連携をとっているか。

課長補佐
文化を観光に結びつけるという意味で観光文化スポーツ部が設置された。博物館法の改正もあったので、

館の方向性を考えながら、何ができるか文化課で検討している。

委員長
観光の担当課と行っているか。

課長補佐
現時点ではそこまで至っていない。観光の課員に知ってもらうため、施設巡りをしたり、部長にも見てもらっている。

委員長
部長は当然だが、一番大事なのは担当職員だ。実際に観光部署の人が館を見て、面白いと感じ、何ができるか考えられるような連携をお願いしたい。

館長
当館だけの課題でなく、近代美術館、万代島との連携もあり、地域として国営越後丘陵公園との連携もある。観光部署を巻き込んで考えていきたい。当館の展示は外国人へのアピール度がとても強いと考えている。さまざまな仕掛けが必要だ。

委員 A
館のポスターは真っ先に駅の観光案内所においている。英語対応ができる職員がいる。また駅から観タクンがある。歴博もコースに入っているはずだが、時間の関係もあり、一番人気なのは摂田屋を回るコースだ。ここまで来るのに時間がかかってしまうのが課題と考えている。ドライバーの減少も問題ではある。

委員長
何かほかに確認したいことはあるか。

委員 B
学校教育に関連して、新潟の歴史がよくわかる展示がされており、修学旅行のニーズがありそうに思う。修学旅行の利用事例は多いか。県内の修学旅行先として選ばれているのか現状を聞かせてほしい。

松谷
今年度は 10 件ほどで、佐渡から 8 校で、そのほかは上越であった。今年度は県内の中学、高校が少なかった。 5 類移行で県外に出る学校が多くなったと考えられる。その代わり、増えたのは魚沼の観光協会が魚沼で自然体験学習を開いていて、その一環で当館に来館いただいている。東京の文京区の小学生、足立区の中学生が多く来ている。コロナ前は群馬の伊勢崎あたりから寺泊に臨海学校で何校か来館していたが、雨でながれたものもあり、今年は 1 校であった。戻ってくるかもしれないので、これから PR が必要かもしれない。

委員 A
始めに 10 校と聞いたが、それは修学旅行か。
松谷　そうである。

委員 A
来館するたびにバスが止まっている気がするが、それは修学旅行ではなくて、学校見学か。

松谷
長岡の学校はバスを持っていないので、越後交通のバスで来る。学年で年 2 回校外学習に出られるそうだ。

委員長
ほかになければ、以上で議事は終了したい。検討会の日程調整は事務局に願いたい。

館長
本日は具体的指摘をいただいた。いろいろな面で検討に入っていきたい。

事務局
これで閉会とする。

令和5年度第2回新潟県立歴史博物館評価委員会
次第

令和6年6月10日（月）
10：00～12:00
まちなかキャンパス302会議室

1　開　会

2　議　事

(1)　令和5年度評価について
(2)　執筆者分担協議

3　閉会

○配付資料

【資料1】令和5年度活動評価表（事前配付）

令和５年度第二回評価委員会　議事録

令和５年６月 10 日
９時 50 分～午前 11 時 30 分
まちなかキャンパス　302 会議室

出席者：山本副委員長、金山委員、内藤委員、小林委員、湯淺委員、廣井課長補佐、神田主任
小原館長、山田副館長、浅井学芸課長、山田経営企画課長、松谷経営企画課専門研究員

事務局
これより、令和５年度第２回評価委員会を開催する。
本日は会場の都合で、12 時には撤収完了とさせていただきたいので、ご協力をお願いする。
それでは初めに、県文化課課長補佐の廣井よりご挨拶申し上げる。

文化課廣井課長補佐（挨拶）
令和５年度第２回新潟県立歴史博物館評価委員会の開催に当たり、一言ごあいさつをさせていただく。
委員の皆様におかれましては、本日はご多用のところご参集いただき、また日頃より本県の博物館行政にご理解、ご協力を賜り、感謝申し上げる。
今年度、県では、文化振興等に関する基本理念、県の責務、施策の基本となる事項等を定めた「新潟県文化振興条例」を４月１日から施行した。本条例の第 15 条には、「県は、博物館等自らが設置する文化施設を文化活動の拠点とし、文化の鑑賞、創造、学び及び交流の場としての機能の充実を図るとともに、それぞれの文化施設の特色を生かした文化に関する教育及び普及啓発その他の必要な施策を講ずるよう努める」と定められたところである。今後、本条例に基づき、年度内に「基本計画」を定め、これから進めていこうというところである。
また、委員の皆様からのご意見も踏まえ、６月 14 日付けで歴史博物館規則を改正して、企画展の観覧者が常設展を無料で鑑賞いただけるようにした。より多くの県民の皆様から常設展をご鑑賞いただきたいと考えている。
終わりに、本県の博物館がますます発展していくために、魅力ある運営のあり方などについて、皆様から忌憚なくご意見を頂戴したい。

事務局
続きまして、歴史博物館館長の小原よりご挨拶する。

館長（挨拶要旨）
評価委員の皆様におかれましてはご多用のところお集まりをいただき感謝申し上げる。
また、宍戸委員長が急遽体調を崩されご欠席となったため、山本副委員長に議事の進行をよろしくお願いしたい。
さて、今ほど廣井課長補佐から話があったとおり、令和４年度の評価報告において、観覧料の徴収方法の見直しについても皆様から言及いただいた甲斐もあり、実質的には、夏の企画展示から、企画展のチケットで常設展も観覧できるようになった。厚く御礼申し上げる。常設展に多くのお客様がいらしていただけるのではないかと期待している。

現状は、コロナ禍後の、いわばニューノーマルともいえるような時代を迎えており、環境面非常に大きく変化しているところである。当博物館としては、令和９年度までの運営方針に基づき、また、環境の変化をしっかり捉えて、基本理念の実現に努めてまいりたいと思っている。
引き続き、評価委員の皆様方からは、地域の代表として、あるいはそれぞれのご専門の立場から忌憚のないご意見やご指摘をいただき、ご評価をいただければと思っており、今後の博物館経営に是非とも活かして参りたいと考えている。
皆様からのご指摘、ご意見が、博物館の経営を適切に運営していく上で非常に大きな力になっている。
本日はどうぞよろしくお願いしたい。

事務局
本日、宍戸委員長は欠席されておりますので、ここからの進行を山本副委員長様に願いしたい。

事務局説明・質疑応答・委員会評価決定

副委員長
お疲れ様でございます。委員長先生が体調不良でお休みです。昨日知りました。皆様から力を貸していただきたいので、よろしくお願いしたい。
また、今ほどの規則改正のお話、ありがとうございました。本当に良かったと思う。よろしくお願いしたい。
それでは、本日は令和５年度の活動について、委員会としての評価を行い、執筆の分担を決めていきたい。
項目ごとに事務局から説明していただき、質疑応答と、委員会の評価を決定していきたいと思う。
なお、「総括」は例年同様最後に行いたい。
それではまず、資料に基づいて説明をお願いしたい。

学芸課長
「収集保管」に関しては、収蔵資料目録の刊行は目標値１に対して、『越後文書宝翰集　中条氏文書・羽黒氏文書・大輪寺文書』を刊行し目標を達成した。データベースの公開に関しては、今年度からは新たに公開したものに加えて、内容を充実して更新したものもカウントするように変更し、目標 300 件以上に対して実績 1,889 件と目標を上回った。収集保管に関しては大きな事故もなく粛々とすすめた。課題としては、未整理の資料まだ多く残っているが、整理する人員が不足している。また、収蔵庫が満杯状態で、新たな寄贈などをお断りすることも増えてきている。自己評価は、「評価できる」とした。
「常設展示」に関しては、新しい指標として新規展示試行回数という目標を設定した。今年度は常設展示室入口に地図を張り出してお客様がどこからおいでになったかを自分でシールで貼るようなものを設置した。これを１件とカウントしてある。ワンポイント解説は参加者目標 500 人に対して毎週土日に実施して 665 人と目標を上回った。分析について、展示室照明の LED 化は進んだものの、全部には至っていない。蛍光灯は生産中止になっているので、LED 化は今後も進めていかなければならない。また、今後も新たな展示手法などを取り入れていきたいと考えている。自己評価は、「評価できる」とした。

委員Ｃ
データベースの公開は更新の分も含めたという話ですね。新規と更新の割合は？

学芸課長
５年度に関しては、ほぼ更新。新規はほとんどない。

委員Ｄ
実績数値の更新の中に新規がどのぐらいであったか示してもらった方が判り易い。

委員Ａ
内容更新を含むのは５年度からか？であればなおさら新規・更新の内訳を示してもらいたい。

館長
５年度は更新をしっかりやろうということで取り組んだ。内訳については更新の件数と新規の件数を明示させていただく。(1,889 件中、新規は０件)

委員Ｄ
更新を充実させることも大事だと思う。

委員Ｃ
不備の改善を重点的に行う方針としたということがわかるようにしてもらうといいと思う。

委員Ｂ
目標３００件に対し、更新を含めると実績１８８９件。これだけ乖離があるなら目標をもっと上げる必要があるのでは？

館長
５年度は更新を重点的に集中して取り組んだ。
今後は新規が中心となってくるので、３００の目標は簡単な数字ではない。このまま維持したい。

委員Ｄ
収蔵庫の満杯状態について、解消の見込みは？

学芸課長
収蔵庫の拡張は難しい。他の収蔵施設もない。市町村のような廃校利用等についても、保存環境において不適切で利用できない。

副委員長
「収集保管」の評価については評価できるでよろしいか。

各委員
評価できるでよい。

委員Ｄ

常設展示の破損があったということだが、収集保管では大きな事故もなかったとある。これはあくまで、文化財ではなく模型の破損であるので、カウントしていないということでよいか。

学芸課長
そのとおりである。

副委員長
では、「常設展示」について。

委員Ｃ
新しい展示手法、どこから来たかっていうのは１年間実施したのか。ここから見えてきたものは？

学芸課長、館長
約３週間の実施であった。アンケートでは見えてこないデータが得られた。これはマーケティングの観点からも重要である。６年度も実施したい。海外からブラジル、フィリピン、イタリア、フランスなどから来られたお客様もいた。全体として、県内が５１％、県外が４６％、海外が２％であった。意外と県外の方が多かった。県外の半分が関東で５１％、東北が９％、中部が２０％、近畿が１０％でかなりいろいろな地域から来られているという結果が出た。こういった調査は今まできちんとできていなかった。今後継続していくことによっていろいろな姿が見えてくると思われるので、研究を進めていきたい。

副委員長
企画展では実施しないのか。

館長
まだやっていない。まずは常設展で実施し、今後については企画展等にも展開しデータを集めていければと考える。

委員Ａ
素晴らしい取り組みだと思う。これをデータ化することが非常に大事なので、ぜひやっていただきたい。

委員Ａ
(６)の新規展示手法の取り組みの一環という書き出しだが、ちょっとしっくりこない。説明していただきたい。

館長
新しい展示をどうするかという観点でその実績をという読み方ができると思うが、今回のような新しいアンケートのしかたも新規展示手法に含めて今年度の実績を評価したということである。
お客様も、こういうものを見ることでいろいろな方がいらっしゃってるんだという興味を持ち、そうすることによって見方も変わってくるだろうと思われる。

委員Ｃ

LED 化は何割進んだのか。何が残っているのか。

学芸課長
終わっているのは、新潟県のあゆみ、縄文文化を探る、雪とくらしの一部である。全く手が付いていないのは、米づくりと縄文人の世界。

委員 C
６割ぐらいか。

学芸課長
６割まではいっていない。

館長
残りの分の LED 化は予算が取れていない。今後県と協議をしていかなければならない。

委員 C
展示模型の破損の状況については？

学芸課長
展示模型の破損については、お客様が躓いて手をついてしまったことにより、御金荷の行列の馬などの模型が破損したもの。修理するまでに２カ月ほどかかった。当初の目論見よりも経費も掛からず、期間も短く済んだ。修理期間中は壊れてしまった部分を撤去してあったが、違和感なく気付く方もあまりいなかったのではないか。

各委員
評価できるでよい。

学芸課長
「企画展」については、評価指標を今年度から企画展示ジャンル数ということに変更した。いろいろな分野の展示をすることで､お客様のニーズにもこたえることができると考える｡目標３に対して実績３であった。様々なジャンルを満遍なく実施した。満足度はアンケートの数字で目標９０％に対して実績９３％で目標を上回った。前回の委員会で指摘のあったアンケート回収数については、記載の通りである。企画展は予算があり観覧料を徴収できる展示、テーマ展は予算がなく常設展示観覧料で観覧できる展示である。夏季企画展の上杉景勝展については、マスコミとの連携もあって多くのお客様に来場いただいた。山の洲文化財展は静岡、山梨、長野との４県連携で初めて実施したもの。守れ文化財は、障碍者がテーマで非常に興味深い展示であった。冬の越後の木綿展は、各市町村の小規模な資料館と連携して死蔵されているような資料を掘り起こすものであった。
学芸員の数が減り、予算も無い中で企画展を開催することが難しくなっている。今後はボランティアの活用なども検討したい。お金のない分は創意工夫で補うようにするしかない。
以上を踏まえて自己評価は評価できるとした。

委員Ａ
守れ文化財はすばらしかった。力が入っていて意義ある展示だった。

学芸課長
守れ文化財展はアンケートの回収率も高く、書かれている内容も熱いコメントが多かった。非常に高い意識をもって来られた方が多かったのではないか。展示の担当者が外部資金なども得て、外部の方々と協力しながら実施したもの。

委員Ｂ
ボランティアの活用については何か目算があるのか。

学芸課長
お願いできるのは単純作業になるであろう。例えば、自作のパネル作成の手伝いなどを考えている。

副委員長
評価できるでよろしいでしょうか？　では、評価できるで

学芸課長
「調査・研究」に関して、外部研究費取得件数の目標６に対して、実績１２件で、このうち研究分担と研究協力が７件であった。学会発表等は目標１１に対して実績１６回で目標を上回った。論文等執筆件数も目標５５件に対して実績５７件で上回った。学芸員の人数が減っていく中で、目標を上回ることができたが、今後については若干不安がある。

委員Ｂ
研究員が減少しているにも関わらず目標を上回ったということだが、これは研究員が頑張ったということだろうが、他に何か。

学芸課長
頑張ったとしか表現できない。

副委員長
外部研究費について。さらなる獲得とは？

学芸課長
５年度に関してはすべて日本学術振興会の科学研究費助成である。助成金は科研費以外もあるので、そういったものを狙っていくのもあるし、大学などとの共同研究のようなものもある。

経営企画課長
「学校教育」について、「県内小学校利用率」は、県内小学校 432 校中、101 校から来館または出前授業でご利用いただき、目標 30%に対し実績は 23%だった。この指標は下降基調だが、県内小学校の統廃合により学校数が減っていることに加え、コロナの５類移行を受け、修学旅行先が県外に移り来館校数が減小

しているという背景がある。ただし、出前授業の件数は大きく増加した。
「体験活動の新規プログラム導入件数」は、目標１件に対し実績は２件だった。企画展やテーマ展示にちなんだ「クルリンまといスティックを作ろう」「くるみボタンを作ろう」の２件を企画、実施した。
「体験プログラム参加者満足度」は、プログラムの種類を増やすなど満足度の向上に努めており、目標 90%に対し実績は 100%だった。
なお、評価指標ではないが、学校への利用案内の送付、県教育委員会高校生インターンシップ、中学生の職場体験受け入れなど学校との連携に努めている。
来館校数や利用率の増加、満足度の向上につながるよう、今後も広報活動や学校のニーズに合わせた案内の実施、新規体験プログラムの開発に努めていきたい。
県内小学校利用率は目標に届かなかったが、他の指標は目標を達成しており、自己評価については総合的に見て「評価できる」とした。

委員 C
新規の体験プログラム「クルリンまといスティックを作ろう」は、どのような経緯で長岡造形大学の学生のアイデアを採用したのか。

松谷
長岡造形大学で講義をしていた退職した学芸員のプログラムの一環として、春季企画展のテーマである「災害」に合わせ作った。

委員 C
退職なさった方の後任として、誰か博物館から講師を派遣しているのか。

経営企画課長
講師派遣は大学側からの依頼に応じて対応している。

副委員長
私は学校に勤めている。12 ページの分析（3)「バス輸送費の高騰化」はあまり影響がないと思う。私の勤務校の場合は新潟までスクールバスが出るので民間のバスは使わない。それよりも授業時間数の確保が一番の理由ではないか。行き帰りの時間がもったいない。出前事業は道具を持って博物館職員が学校まで来てくれるので移動時間かからないのでありがたい。今後も増えていくと良い。今回も以前より増加しているとのことで、そこは評価できると思う。

委員 B
出前授業のメニューは博物館で決めた中から選ぶのか、学校側からのオーダーに合わせているのか。

松谷
基本的には学校に利用案内を配布し、その中から選択してもらっている。昨年は「勾玉づくり」、「火おこし」、「昔の雪道具体験」、「北前船」を実施した。そのうち、「北前船」は出雲崎小学校からの依頼を受け実施した。令和４年以前は北前船の関連地域において、その地域を活かした特性と北前船を関連付けた授業を行った。

副委員長
交通費はどうしたのか。

松谷
当館予算から支出した。

副委員長
バス代高騰について考えを聞きたい。

松谷
昨年度、当館に団体見学の予約をしたがバスが申し込めず来館できない学校が何校かあった。原因としてバス代高騰や運転手不足が考えられた。スクールバスを保有している地域はいいが、そうでない地域もある。

各委員
「評価できる」とする。

経営企画課長
「社会教育」の「出前講座」は 12 市町村で 32 回実施、参加者は 618 人だった。胎内市など遠方でも開催した。「参加者満足度」の実績は、目標の 90%に対して 97%だった。
「館員の講座・講演会」は 42 講座を実施、参加者は 1,265 人だった。企画展と連動した講座・講演会の実施など満足度の向上に努めており、目標の 90%に対して実績は 95%だった。
「ボランティアの活動延べ人数」は、目標 500 人に対して実績は 440 人だったが、令和 4 年度よりは大幅に増加した。登録者数は 34 人で、4 年度より大きく増加しているし、コロナ時の制限をなくし通常の活動を行った。中学生ボランティアは応募がなかった。
「出前講座」は、予算の関係で、今年度から実施希望者側に当館職員の交通費のご負担をお願いしているため周知を行うとともに、広報に努め、新規参加者やリピーターの獲得と維持、満足度の向上に取り組んでいきたい。
「ボランティア」については、参加者がやりがいをもって活動できるよう、参加者・当館双方にメリットがあるような活動を検討していきたいと考えている。
「ボランティアの活動延べ人数」が目標を下回ったが、4 年度よりは大きく改善していること、講座関係の指標が目標を上回っていることから、総合的に見て、「評価できる」とした。

副委員長
「出前講座は県内 12 市町村からの要請」とあるが、毎年回る地域は同じなのか。

経営企画課長
要望を取って調整を行っている。

副委員長
断っている団体も多数あるのか。

経営企画課長
調整がつかなければ断ることもある。

委員Ｃ
人気の講座は何か。

経営企画課長
館がメニューを示し、自治会等が人数や規模等を勘案し選んでいる。一人の学芸員に偏らないようバランスも考慮しているので、人気がどうかということはわからない。

副委員長
学芸員は何人か。

経営企画課長
11 人である。

委員Ｄ
出前授業は１人あたりの実施回数はないのか。

経営企画課長
出前授業は出前講座と違い、館内の行事や団体対応等と調整の上、可能な限り対応する形をとっている。

委員Ｂ
コロナ前と比較し、状況が戻ってきているという感触はあるか。

経営企画課長
館外、館内の活動両方においてかなり戻りつつあると感じる。講座等では人数などの各種制限を解除しているので、利用者は増加している。企画展についてはもう少し頑張りたい。

館長
観覧者数は肌感覚でコロナ前の７～８割程度となっている。

副委員長
中学生ボランティアがいなかったのは残念だ。

委員Ｃ
たまたま５年度だけ応募がなかったのか。

松谷
何年か前にもあった。中学生が館に来ることになるので、保護者の理解も必要となる。また部活動があったりすると土日のボランティアができない場合がある。

館長
来館できる生徒は限られてくる。ただニーズはあるようなので、６年度は校長先生に直接依頼に行ったりしたことで応募に繋がった。

各委員
「評価できる」とする。

学芸課長
「連携」について、地域史研究ネットワーク事業数については目標２件に対し実績が１件で目標を下回った。実施したのは毎年館内で実施している IPM 研修について地域史研究ネットワークを利用して県内の文化財関係者などに参加を促したものである。

経営企画課長
以前まで２つのカテゴリーだった学術面の地域連携と地域づくりの連携を今年度から統合した。
地域団体活動への参画件数の 10 件は、（７）（８）（10）の件数の合計であり、目標の 15 件を下回った。ただ。連携可能な団体とのつながりをより深めるため、取組の見直しを行うなどはしている。

学芸課長
分析としては、学術面では、地域史研究ネットワークについては当館が県内の博物館のセンター的な役割を果たすために行っている取組であるが、十分に役割を果たし切れていないところがあると考えている。ただ、文化財関係の組織や団体等に対しては、展示に限らず調査関係等いろいろな方面で協力を行っており、頼りにされている。

経営企画課長
地域との連携については、（４）に記載しているがサイノカミで前日準備を地域の親子に参加してもらって行なう等取組内容の見直しを図っている例もある。連携可能な団体とのつながりをより深める取組や新規団体の開拓にも努めていきたい。

副委員長
自己評価をやや評価できるとしたのはなぜか。

経営企画課長
実績自体は目標を下回っているが、数値だけでは量ることができない連携の実施内容や結果を踏まえ、「やや評価できる」とした。

館長
連携には様々な形があり、整理が難しい。評価指標としては学術面では地域史研究ネットワーク事業数だけをカウントしているが、これ以外にも様々な形で連携しており、実情を勘案しこのような評価となった。

委員 A
毎年サイノカミを代表選手として挙げているが、サイノカミだけではなく新しい連携先を模索してはどう

か。

経営企画課長
新たな連携としては、今年度は、新潟県高等学校文化連盟と連携し、当館を素材とした新聞制作の講習会を実施するなどしている。

各委員
「やや評価できる」とする。

経営企画課長
「新聞・雑誌・テレビ等に報道掲載された件数」の実績は、左から新聞、雑誌、テレビ・ラジオであり、いずれも目標を達成することができた。コロナの自粛モードから平時に戻ってきたことで、雑誌などに多くご掲載いただけたものと推察される。
「館ホームページへのアクセス件数」は、目標 100,000 件のところ、実績は 110,625 件だった。実績が令和４年度より下回っているのは、令和５年の７月からグーグルアナリティクスのバージョンが変わり、一定時間ページに留まらないと、１件とカウントされなくなったためである。
なお、評価項目ではないが、SNS の実績は、取組実績の（２）に記載した。担当者の頑張りで概ね１日１件は投稿を行っており、フォロワーも令和４年度を上回っている。内容も、展覧会やイベントの告知だけではなく、動画の活用や当館職員の活動の紹介など、当館に興味を持ってもらえるような発信に努めている。
今後については、年々予算が厳しくなってきており、更に効果的な発信ができるよう努めていく。
HP や SNS については、活用者が多い若年層からミドル世代が中心とはなるが発信を継続し、当館に興味を持ってもらい、来館に繋げられるよう努めていく。
いずれの評価指標も目標を達成しており、自己評価は「評価できる」とした。

各委員
「評価できる」とする。

経営企画課長
「管理運営」の「全体収支比率」については、目標の５％に対して実績は 5.3%だった。令和４年度より支出額は増加したが、入館料収入が大きく増えたことが改善の要因と考えられる。
「評価指標項目の達成率」は 85%だった。
その他の取組としては、運営方針に沿って活動を行い検証・評価を継続したほか、館内での目標や取組などの共有、さらに、コロナの５類移行による来館者の増加に備え業務の再確認を行うなど、安定的な館運営に努めた。
また、収蔵資料や来館者の安全に影響を及ぼさないよう、老朽化した施設・設備の更新や修繕を行ったほか、緊急時に備え、避難訓練を３回行った。
今後は、新型コロナにより減少した入館者の早期回復に努めるとともに、開館から 20 年以上経過した施設・設備の計画的な更新や補修を行う必要がある。

副委員長
この項目は評価はないが、何かあるか。

委員Ｄ
最近もあったが、地震対応はどうしているか。

経営企画課長
地震発生直後に初動対応の職員が館内外の被害状況や人員の安否確認を行う。その結果を文化課、長岡地域振興局に連絡する。
また、地震等の発生に備えて年３日、１日２回行うため年間計６回防災訓練を実施し、限られた人員で来館者の避難等ができるよう訓練している。

委員Ｃ
「取組実績」（５）の「火災等」とは地震も含まれているということか。

経営企画課長
含まれている。基本的な職員の動きは火災も地震も大きく変わらない。

委員Ｃ
１月１日発生の地震対応に人員がとられ館業務運営に支障が出るなどの影響はあったか。

館長
文化財レスキューの協力要請がきており、今後対応予定である。

副館長
まず１ページ「取組実績」について、利用者数・観覧者数の両方とも目標は増加させるとした。実績は前年比約３割増加した。
一方満足度の目標は維持向上させるとしたが、概ね前年並みかそれ以上の高い満足度となっている。
個別の取り組み実績はすでに説明済みである。
次に２ページの分析について、常設展・企画展ともに観覧者数は増加した。常設展が前年比 112%、企画展が 177%となっている。逆に学校団体来館者数は前年比 88%と、減少した。原因は新型コロナにより増加した県内修学旅行数が昨年５月の５類移行に伴い、減少したことが大きな要因である。
また成果として、学会発表や論文執筆件数の増、ＳＮＳフォ、ｍロワーの着実な増加等が挙げられる。
最後に自己評価は、観覧者数及び利用者数が前年より確実に増加していること、満足度も概ね昨年並みかそれ以上の数値となっていること、学会発表や論文執筆件数等が増加していること、ＳＮＳフォロワーが着実に増加していることなどの成果が見られることから、評価できるとした。

各委員
「評価できる」とする。

閉会
館長（挨拶）
長時間にわたり審議していただき感謝する。山本副委員長においては急な依頼に関わらず円滑に議事を進めていただきありがとうございました。

委員の皆様からは引続き極めて高い見地からのご指摘・ご意見をいただいた。評価に関しては当博物館の自己評価を尊重していただき一安心している。現在、経営資源が削減方向にあり限られているため、目指す姿を実現していくためには企画面において創意工夫を徹底していくしかない。本日はその創意工夫を実行していく上で多くのご示唆、ヒントを頂戴したと感じている。今回いただいたご指摘ご意見等を経営にしっかりと取り込み、博物館の価値そのものを高めていきたいので引き続きご支援いただきたい。
本日は大変ありがとうございました。

副館長
今後の日程については、委員長が不在のため、後日確認し改めて調整する。今後はもう一度集まり、最後にまとめたものを８月中に観光文化スポーツ部長に提出する予定としている。

委員Ａ
以前は最終形の評価表をテキストで事務局から出してもらっていたが、その方式も今回もとりたい。

事務局
今月末までに原稿を作り、それを元に７月中に検討会を開催したい。

館長
本日の審議内容は事務局から委員長に伝える。

事務局
これで閉会とする。

新潟県立歴史博物館評価委員会報告書
発 行 日：　　令和６年８月２９日
編集発行：　　新潟県立歴史博物館評価委員会